

# 良寛さまと鯨

緑川

「ただいま」

僕は家に帰ると、まずお母さんに声をかけ、きれいに整頓された自分の部屋に行く。そして、ランドセルを放り投げずに、きちんと学習机の横に置いて、台所へ行く。台所では、いつものように、お母さんがおやつを用意してくれる。

「おかえり。今日はどうだった？」

お母さんは、僕を遠慮がちに見る。あるいは不安そうに見える。少し前までは、期待と信頼のこもったまなざしだった。

「うん。今日も先生の質問には、全部手をあげたよ。給食も残さず食べた」

僕は正直に答える。お母さんはますます不安そうな顔をすする。

「そう……、えらかったわね」

ちっともほめられている気がしない。

「ほかは、どうだったの？」

「あつ、そうそう、僕、お掃除の時間も、一生懸命にお掃除をした」

お母さんは、今度は暗い表情になる。なんとなく理由が分かる気がする。

僕は、誰の目から見ても、まぎれもなく良い子だ。自分で言うのもなんだが、成績優秀、品行方正な、模範的な小学生ではないだろうか。実際、まわりの大人達から、よくそう言ってもらわれた。友達もみんなすごいと言ってくれた。だから、僕はもっと良い子になろうと努力した。精一杯の努力だった。その成果は、はっきりとあらわれてきている。

「ああ、おなががすいたあ」

僕は、イスに座ったまま、イスごと体を後ろに傾けさせ、投げ出した足をばたばたさせた。お母さんは少し元氣を取り戻したようだ。

「さあ、おやつですよ」

「わあ！」

僕はプラスチックのスプーンをあわててつかみ、ケーキを、ぼろぼろにくずしながら食べた。ケーキを口の中におぼったまま、今度は、児童文学に出てくる小学生のようなことをしゃべった。あらかじめ予習をしていたのだ。ついでに、紅茶をわざと服の袖に引っかけてこぼしてみた。これはやりすぎだっただろうか。だけど、お母さんは、こぼれた紅茶を拭きながら、とてもうれしそうだった。

やがて、僕はおやつを食べ終えると、表に遊びに行くと言った。

「晩御飯までには帰ってくるのよ」

お母さんは少し弾んだ声で言った。もし、僕が自分の部屋で読書をすると言ったなら、もつと沈んだ声だったと思う。

そして僕はとりあえず表に出てみた。だけど、誰とも遊ぶ約束などしていなかったの、僕はひとりだった。

空き地は立ち入り禁止だった。公園はひっそりとしていた。近所には、何人か同級生がいることはいた。遊びに行こうか。

優等生の僕が行くと、皆は歓迎してくれるだろう。だけど、僕にとつて興味のないことばかり、皆はしたがる。いや、ひとりだけ、興味が一致することがあった。ファミコンだ。だけど、これはこれで問題があった。

以前一度だけ、友達の家で、ファミコンをやらせてもらったことがある。僕は、精魂込めて、そのゲームに打ち込んでしまった。こんな面白いものがあるなんて、それまで思いもしなかった。しかし僕はきつぱりとゲームを中断した。こんなものにはまり込んでしまうと大変だ。だけど、家に帰ってからも、僕はその幻影に苦しめられた。あの鮮明なスクリーン、ヴィヴィッドな効果音、緻密に構成されたパラメーターが、何度も何度も、頭の中をよぎっては消えた。夢にさえ見た。僕は良い子だ。この自覚だけが、かろうじて僕を支えた。

結局、僕は公園で、ポケットに隠し持っていた『良寛さま』という本を読んで、夕暮れまで過ごした。

夜、僕が自分の部屋で勉強していると、玄関を開ける音がし

た。そして台所で声がした。

「あいつはまだ勉強しているのか？」

お父さんが帰ってきたようだ。

以前は、どんなに遅くまで僕が頑張っても、お父さんは、満足そうに励ましてくれたものだ。だけど今のお父さんの声は、心配そうな、不満そうな声だ。

「ええ、そうなの。ほんとにあの子ったら、なんにでもあんなに一生懸命に取り組んでばかりで、あのままでは、ゆとりのない人間になりそうで」

「まじめなのはいいことだが、たしかにあれでは子供らしくない。いや、人間らしくない」

「しっ、あなた。あの子に聞こえたら」  
一瞬静かになったけど、やはりとぎれとぎれに声が聞こえてくる。

「このごろ、ほら、まじめすぎる青年が新興宗教に……」

「異性に対して……」

「俺の職場でも、若い連中は……マニュアル……バイタリティが……」

「……最近の子供……それで先生が……」

「だけど、それをどう……いけないことをしているわけでは……  
……なんと……」

やがて台所は静かになり、僕の部屋をノックする音がした。返事をする、お父さんが入ってきた。お父さんは優しく僕に語りかける。

「勉強は楽しいか？」

「うん、」

僕は口ごもりながら答えた。僕は、教科書やノートの新しいページの匂いが好きだ。本を読んでいろいろなことを知るの楽しい。今はまだ難しくよく分からないことでも、いつかきつと分かるようになると思えば、それがまた楽しみだ。先生の言いつけをきちんと守ることは気持ちがいい。道徳の時間に習ったことを実際にやってみて、満足にできたときには、自分の中に力強さを感じる。

「そうか、勉強が好きか。お父さんも好きだった。けどな、勉強するのと同じくらい、お父さんは子供のときには、よく遊んだものだったぞ。いろんないたずらもした」

「うん、僕も今日は家に帰ってから、外で遊んだんだよ」

「ほう、そうか」えらいぞ、とまではさすがに言わなかった。

「友達とは仲良くしているか、うん？」

「もちろんだよ、お父さん。友達っていうのは大切にすべきものなんですよ？」

お父さんは、一瞬変な顔をしたが、すぐに打ち消して力強く言った。

「そうだ、友達ってのは大切なものだ」

そして数秒の沈黙が続いた。

「さあ、勉強もいいが、子供はそろそろ寝る時間だ。さあ、寝なさい」

沈黙を断ち切るようにお父さんが言った。

「うん、今日はこのくらいにしておくよ。でもね、僕、寝る前に少し本を読まないで眠れないんだ。もう少しいいでしょう」

お父さんは、ちらつと僕のベッドの枕元を見た。僕が昼間読んだ『良寛さま』がそこにあった。子供向けの本だった。

「眠る前に少し本を読むのは良い習慣だ。お父さんも、子供の頃はそうだった」

僕は机の上の問題集を片付けて、おとなしくベッドに横になった。お父さんは、それを見届けてから、部屋を出ていった。『良寛さま』の最初の方のページに挿絵が載っている。絵の中では、小さな子供である良寛さまが、もう日も暮れているというのに、ひとりぼっちで、浜辺でしゃがみこんでいる。遠くの方で、大人達が子供の良寛さまを探している。

この人は小さいとき、大人から「そんなカレイのような目つきをしていると、ほんとにカレイになってしまおうぞ」と言われて、それを素直に信じ込んでしまっただけで、「カレイになったら、僕はどうやって生活しようかしら」と心配で、じっと海を見つめていたということだ。

僕は、この挿絵をしばらく眺めただけで本を閉じ、部屋の明かりを消してから、もう一度横になって目を閉じた。

やがて、手足が先の方から次第に重くなり、頭の中で考えることが混ざり合ってきた。

そして遠くで寄せては返す波のさざめく音がする。

へ了

# ほろほろ鳥

小野寺 那仁

明るかった混雑した車内は、急に真っ暗になった。ベージュのコートの母親に慎二はしがみついていた。車内のアナウンスは臨時ニュースを伝えてくる。

「三億円が強奪された事件の被害車両が東京府中市の畑の中に乗り捨てられているのが見つかりました」

おおっと声が挙がった気がする。

ということとは犯人が捕まるのも時間の問題ということなんだ、と慎二は合点する。単にトンネルの通過だったらしく車内は明るくなった。するといつのまにか自分の掴んでいたコートが他人のものだと知り愕然とする。名古屋駅に到着する間中、慎二は電車内を歩き来して父親と母親を探したが、ホームについて乗客がいつぺんに吐き出されるまで彼らに巡り合うことはできなかった。

父親は笑っていたが母親は怒っていた。一瞬、感じた不安は蒸発するように消えていく。

都会に出ることはほとんどなかったのに二週連続で人混みの間を縫うように歩くことになるとは思わなかった。冷蔵庫の中の痛んだ卵を三人で分け合って食べているのを貧しくて金がないのだと小学生の慎二でも理解しないことはなかった。

「さて、今日はどこへ行こうかな？どこがいい？」

すぐには思いつかない。先週は父親の希望で『キングコング』の映画を観た。父親が子供の頃にもやっていたそうだ。その影響もあったのか、父親と自分の趣味の一致ということなら東山動物園のゴリラショーなんかどうだろうかと思っていた。また滅多に外出しないものだからそれぐらいしか思いつかない。

「今日、また刑事がうろろしていたよ」母親が言った。

「相変わらずしつこいやつらだ。まだ疑ってやがる」

どうやら父母はなんらかの事件に巻き込まれているようだった。刑事は父親の持ち物のライカのカメラや小さなテレビ、新しい冷蔵庫、慎二が私立の小学校に通っているなど分不相応な贅沢に何かを嗅ぎつけたらしいのだが、廃屋のような長屋で檻切りのような布団にくるまって寒さに震えていた慎二には貧しさのどん底にいるように思えてならないのだった。慎二はゴリラを思い出す。

数か月前に東山動物園を訪れた。

まだ桜は三分咲きで肌寒く、ペンギンの立つ丘や猿が走り回るコンクリートの山を震えながら眺めていた。園内のモノレールに乗りたいたいという園内の乗り物なんて無駄だ、歩けばいいと父母は珍しく意見が揃った。やっぱりお金はなさそうだと慎

二は思った。それから飼育小屋の中で眼だけ光らせている雌ライオンや茫然と立ち竦んで遙か故郷を眺めている静止したキリンの親子や観客に苔の生した尻を見せたまま銅像のようにまったく動かない犀をみた。犀の背中には小鳥が集って背中の虫を食べていた。それでも犀は気が付いていない。アナコンダも虎もジャガーもほとんど動かないかのろくさとめんどくさそうに歩んでいるかのどちらかだった。

虎の檻の前で慎二の写真を撮影している父親を見て慎二は少々驚いた。カメラなんてあったんだと。いつの間にか買ったのだろう。それに慎二を撮影するのも初めてで隠し撮りのように不意打ちであったからだ。父は家にいるときは不機嫌で母と口論ばかりしていた。そうして酒を飲んでふらりと外へ出て行ってしまふことも何度かあった。日常の中では慎二に無関心であり、わからないことがあつて何か尋ねても辞書を引けというばかりだった。父親はあまり世間のことは知らないし学問を修めたわけでもないので慎二に教えることはなかったのだろう。何冊かの辞書だけは揃えていたが、子供向けの辞書ではわからない言葉は山のようにあつた。

そんな父親が動物園では生き生きとしていた。ユーカリの木の下ではシマリスに餌をやったり孔雀を脅かして羽を開かせて写真に収めたりして喜んでいた。猿山では猿にビスケットをぶつけていた。慎二はどんな動物を見てもあまり感心しなかった。凶鑑に比べるとひどく色合いが悪くて迫力に乏しく眠たがっているような感じがした。十分に餌を貰っているのだろうかと思つたくらいだ。

「このショーを見てみよう」と父親が誘つたのはゴリラのショーだった。ステージに二頭のゴリラと飼育員が居て飼育員が漫才のように掛け合うとゴリラが喜んだり怒つたりするという不思議な見世物だった。ゴリラは演技をしているのだ。大変な人気であるらしく、黒山の人大かりで父親に肩車してもらわなければ何も見ることはできなかった。ゴリラは着ぐるみなのではないかと思うほどに、動きは機敏で素早く、反応が優れていた。拍手喝采を浴びるとバナナを受け取っていた。そのときになって観客たちはゴリラが野生動物であることによく気が付くのだつた。たまさかに怒つたふりをした時などは、真に迫つていて飼育員が襲われるかのような錯覚を生じていた。ゴリラの毛並は光に反射して黄色と茶色の針がびっしりと生えているように見える。父親も見るのは初めてらしく子供っぽくはしゃいでいた。

あれだったらもう一回見てもいいな。今回は始まる前から場所取りしてもっと前の席を確保したい。

それでも動物園に行きたいということはまだ黙っていた。

駅を出るときに間延びした奇妙な音楽が流れてくる。

花も嵐も踏み越えて往くが男の生きる道

と唄っていた。その中にほろほろ鳥という歌詞があつた。ミイラのように包帯でぐるぐる巻きになつた男が右に左に巧みにアコーディオンを傾けて奏で紡ぎ出したどこか寂しいメロディ

だった。男はひとりではない。軍服姿に三角巾で腕を吊った男。片足がなく義足の先が棒になった男。真新しい包帯は痛々しい。幟には傷痕軍人に補償を！とか戦争絶対反対とか天皇陛下万歳などいろいろと文字が書いてある。その数人の集団は縦横に市電の走る名古屋市の中心部において異様に目立つスポーツだった。デパートの前なのに時間が流れていない。彼らが立っているのはアスファルトのビル街でなく満州の曠野なのではないかと。数十年も使っているような募金箱が傍らにあり寄付を呼びかけていたが、ほとんど誰からも相手にされていなくて素通りされていた。それが慎二の心に留まったのはテレビや映画の画面からは流れてこない光景で、地方には傷痕軍人はいないからだった。

「そうだ。ほろほろ鳥とかいう鳥を見に行こうよ」

「え？」父親は慎二の顔をまじまじと見る。

「そんな鳥はいないよ。動物園には」

「知ってるの？」

「いるわけないよ。あれは戦地を唄っているんだから中国かピルマなんかの鳥だろう」

「動物園ならいるに決まってるよネ」

「いないよ。動物園はツマらん鳥は飼わないからね。ほろほろ鳥は珍しくはないんだ。普通に食べているんだ」

「ホントかあ」

「うるさいなあ。辞書で調べてみる！」

手垢にまみれた辞書を繰ってみただけれどやっぱり子供向けだから出てこない。図鑑なら出てくるだろうが今はみられない。

本当はほろほろ鳥なんて貧乏くさそうな鳥はどうでもよかったのだ。動物園という言葉に乗ってこなかった父親は今日は機嫌が悪くなっているのだろうなと感じた。そう思いながらも思いついて言ってみる。

「動物園ならゴリラショーだって見れるよ。この前は、よく見えなかった」

「ああ、ゴリラかあ。あれは残念だったよね。あれ、もうやってないんだよ」言いにくそうだ。

「どうして？」

「ゴリラが飼育員を投げ飛ばして頸の骨が折れて死んでしまったんだ。ゴリラはいるけどショーはしない」

「いつ？いつ！」慎二は父親の数倍もテレビを見て新聞も読んでいたからそんな大事件は知らないはずはないと思った。

「それは嘘じゃないよ」母親も言った。「じゃあ、今日は資生堂パーラーでフルコースを食べようつか？」慎二はうなづいた。次の言葉がどうして出てきたのかは慎二自身にもよくわからないのだが何か父親に話しかけたくなったのだ。

「しようにい軍人って可哀そうだね」

「へええ、あんな難しい字がよく読めたね」母親が珍しく褒めた。

「適当に言ったただだよ」

「可哀そう？」父親は不機嫌を通り越して半ば怒りの表情を見せていた。

「だって、手や足を戦争で失っているんでしょ」

「所詮、辞書や本で学んだ知識なんてその程度のものなんだろ

うな」独り言のように言う。

「なあ俺の兄貴の伸介伯父さん知ってるよな」

「ううんと。知ってる」

「あの人は職業軍人だったんだよ。しかも二度負傷して内地召還になって三度目に出征してまた負傷した。それでも生きているじゃないか、工場で働いて、議員にもなった」  
「なんのことやらわからず慎二は沈黙していた。」

「戦争が終わって何年になる。もう二十年も過ぎてるんだ。今でも治らない怪我なんてあるかい！少なくとも包帯はしていない！」

「終戦のとき、俺は小学生だった。な、中学生や高校生で戦争に行くやつなんていると思うか？あいつらをよく見てみる」父親は傷痕軍人を指さした。

「俺と同じくらいか俺よりも若いくらいだ。戦災孤児ならわかるよ。でも軍服を着てる」

「でも、でも、脚がないじゃないか」

「聴こえないのか父親はまだしゃべっている。」

「負傷したものはシベリア帰りでなければ国は補償してるんだ。都合のいいことは語らずに都合の悪いことばかり語る」

「でもさ、実際、脚がないんじゃない？」

「あれはフラミンゴのように脚を折りたたんでいるんだ」

「へええ。そこまでするんか」慎二は感心した。

「何なら、あいつらの化けの皮を剥いでやろうか。あの棒切れの脚を蹴飛ばしてやるんだ」

「それは、やめて！私服が尾行しているかもしれないから」母親が制止した。こころなしか父親の機嫌がよくなっている気がした。

「あいつらはな、【騙り】であって【乞丐】なんだな、わからないだろう。辞書で調べてみる！」

へ了へ

# 離れ、交わる

牧村 拓

乾ききつた草原にへばりついた雑草を思わせる産毛とよくかき混ぜられた上等な生クリームを思わせる白い肌。後ろを向いてブラウスをはだけ、上半身をさらけ出し、ただ君は『なにか』をじっと待っている。君にそれを屈けてあげられるのは僕だけだ。『なにか』とは君にとって自分を固定化し、地に足をつけさせてくれるもので、精神が浮揚している君に与えられるべきものだ。だから僕は君の肌を焼く。焼くという表現はよくない。それは言ってしまうえば、ありつたけの愛情を込めた『キス』のようなものだ。愛しさと憎らしさをないまぜにして出来上がった僕の中の君の像を、君の中へと焼きつかせるための『キス』。

「ねえ、今からすることについて君はどう考えているんだらう」

返事はない。だから僕は『キス』をする。ふたつの肩甲骨、そのちようどまんなか辺りの肌が焼け焦げ、爛れていく様をじ

っと待っている。ゆっくりと慈しむように、けれど性急な残酷さを持って、僕は火を灯した煙草を君に押し付けていく。祈りを捧げているような姿でもあった。僕に表情はない。今の僕と君との間に介在するべきものではないからだ。そこにはどんな不純物も混じっていてはならない。混じってしまったら、それはもう『キス』としての意味を果たせなくなり、ただのありふれた下劣な行為に成り下がってしまう。

煙草を少し下にずらし、また『キス』をする。肌から火種が離れた瞬間に、君がちいさく呻き声をあげる。一層のこと君を愛おしく思う。僕はまたじっくりと待っている。どんどん満ちてくる水を必死に湛えている水瓶みたいだ。君みたいに大切な存在を傷つけるのは、必ずしも僕の望むところではない。けれど、何かしらの変化を望むならば、そこでは血が流されなければならぬ。それはもちろん形而上学的なことではあるのだけれど、『ここ』では君に実際の血を流してもらう。なぜなら君と僕の関係は、お互いの夢と空想だけを材料として作りあげたものだからだ。そのような関係を地に根付かせるためには実際的なものが必要になる。

火種の消えかかる煙草に火を点けなおして煙を吸い込む。肉の焦げたような匂いと血のなま臭さが鼻につく。これはしかるべき犠牲を払うことよってなされる尊い行為なのだ。いっそのこと『儀式』と呼んでもいいかもしれない。君の肌を生贄として捧げ、君の血を供物として預かり、僕が君を昇華させる。一連の行為の正当性について、僕は何の疑いも持っていない。生贄として身を捧げる女を思わせる。犠牲についても僕と君の



間では些細な問題としてすら立ちあはだからないだろう。僕らは激しく傷つけあってきた。そのたびにお互いに癒し、お互いに傷を掘り返し、そしてまた舐めあって生きてきた。そのような関係性においては、犠牲とは日常的に払われるコストでしかない。そう、コストなのだ。僕らが夢と妄想の上に浮かんだ生活を続けるために必要であったコスト。もちろん僕は定期的にかちんと払い続けてきたつもりだった。けれど、僕らの前ではいささか小さすぎるものであったらしい。だから今の僕はこうして彼女の同意を得たうえでコストをまとめて支払っている。帳尻合わせをしているみたいだけど、世界はそういう風にできているのだ。頭が出っ張れば尻尾が隠れてしまう。それだけのことだ。

君の白い肌にまた赤黒い痕が残ったのを確認して、また少し下に煙草の先端を持っていく。君も『行為』に慣れてきたように、黙って自分のつま先を見つめている。世界というものが何であるのか。僕にとつての命題のひとつだ。それは随分とあやふやなイメージで成り立っているように思われる。たとえば僕にとつての世界と君にとつての世界はまったく違うものなのかもしれない。さらに言えば僕らそれぞれの世界と僕ら二人の世界もまったく違うものだろう。でも僕らはこうしてごく近い距離で生きている。それはイソギンチャクとクマノミみたいにも見える。互いの世界が衝突してしまわないように、あるいは互いの世界が溶け合うように、便宜を図りながら生きている。果たしてそんなことが可能だったろうか。その歪みの証明として僕は今、コストを払っているようにも思える。けれど、世界と

いうものは意外に優しいものなのだとも思う。少なくとも僕らが抵抗する余地を残してくれている。それだけで十分なのではないか。それさえも許されない、本当に絶望的な世界だってあるのだろう。僕らにとつての世界が優しい。それを感じ取れただけでもこの『キス』には意味があるのだろう。

最後に煙草を押し当てる。今まで以上にゆっくりと確実に君の肌を焼いていく。君は変わらさじつと押し黙って耐えている。ひとつの声も漏らさない。僕と君の息遣いと煙草が燃えていくちりちりとした音だけがある。君は泣きだす。

「やっぱり辛かった？今ならまだ引き返すこともできるんだよ」

「ううん、そうじゃないの。ただ自分があるべき姿になっていくのが感じられて嬉しいんだよ。けれどそれは以前までの私とまるで違う私になることで、だから私は泣いているの。私自身への手向けとして」

その涙は僕らの間で長いこと待たれていたものなんだ。だから誰に憚ることもなく泣けばいい。言おうとした唇は、一つの太い線になり、動かない。

「だから私はここで泣くの。誰に邪魔されることもなく」

話している間に凝縮された最後の一点は綺麗な痕になり、君の肌を、あるいは君自身をすっかり別のものにしてしまった。君の背中には『H』の文字が浮かび上がっている。僕と君のそれぞれを示すものとしても、僕らの間に存在するものを示すものとしてもそこにある。絶望的な思いを吸い込んだ大地溝帯みたいだ。あるいはこれからの君がそれを後悔することだってあ

るだろう。けれど、今の君は間違はなくそれを必要としているし、僕だってそうだった。ならば、これは恥じるところのない  
正当な戦いの痕なのだ。

君はここにいるし、僕は隣にいる。それだけのことに正当性を与えるには大袈裟な『行為』だったかもしれない。けれど大きく歪んだ僕らの間を埋めようとするならば、大きなものが必要となる。時にそれは僕らを覆いつくし、僕らを変容させてしまうだろう。けれど、決して大きな力が届かないものもある。たとえば愛がそうだ。僕は変わらず君を愛すし、君は変わらず僕を愛する。これだけのことが今の僕らを充足させる。そうでもしなれば手に入らないものに執着する様は、誰かから見ればまったく間違っているだろう。けれど、確かにある愛を僕らが慈しみ、愛を媒体として寄り添い生きていくことの正しさを、僕は知っている。だから、ひとつの終わりとひとつの始まりを示すために、君にキスをする。コンクリートにしがみ付いた苔のような僕の髭と小さな芋虫が2匹横たわっているような君の唇が、すれ違ってから、触れ合った。

へ了

# 弓返し

小山内 豊

射場に五人並び、大前、一人目の射手が矢を放つ。即座に、乾いた硬質の音が響く。二的、つまり二人目の射手である木藤には、それを見届ける余裕はない。座射であるから、前の射手が矢を放つ前に、すでに矢を弓に当て、立ち上がっている。木藤は「柔らかく……」と、念じながら足を踏み、胴を作り体の重心を固定する。手の内を整えのりをみる。的は学生のころ見たそれより小さくなったように感じられる。そして深く構え静止し、放つ。矢は身を躍らせ風を切り、深々と的に突き立った。ぐっと、体が熱を帯び、動悸が高まる。その満足感からか、射たあとに身を落ち着かせる動作である、残心がおろそかになった。(初山に見られたか)と、木藤の心は乱れた。道場の責任者である初山は範士で七段、弓道の権化だ。わずかな乱れも見逃すはずはなかった。二射目は動揺からかすべての動作が早急で、自身でも落ち着きのなさを感じた。

「十年ぶりにしてはいいね」と、待機室に入るなり初山に言わ

れた。いやみな言い方ではない。範士として後進である木藤を指導しているのだ。

「当てたい気持ちが出てしまいました」

「それはそうだけど、型はいいよ。練習すれば、錬士になれる」

「錬士ですか」と、木藤は笑いながら席に着く。褒めたのだから、悔しかった。真面目に取り組めば、錬士の二つ上の称号である、範士、つまり初山と同じところまではいけるつもりでいた。大学の卒業と同時に辞めた弓道をいまさら再開するのなら、登れるところまで登ってやろうという気持ちがあるのだ。

それでいいことは全部だと言わんばかりに、初山は射場へ注意を向ける。十年ぶりに弓を握った人間の技量がその程度であるのは仕方がないが、それにしても冷淡である。もともとの性格なのか、それとも責任者としての自制心がそうさせているのかわからない。ほかの会員はどのように思っているのか。おいおい聞いてみたいものだ、と、木藤は思った。部屋の壁に掲示された名札をみたなら、その序列のいちばんに、初山の黒く馴染んだ名札が下げられている。それから二つあけて、六段、教士の何某のもの、続いてもう一人。教士は二人だけで、以下には錬士が続く。錬士の一番は五十川だ。ちょうどその五十川が射場に入り、射位にはいった。白い弓道衣の下から、引き締まった筋肉が盛り上がっている。仕事は消防士だと聞いている。この弓道場において、初山が静であるとすれば、動は五十川である。淡々と、それでいて緊張感を湛えた演武をみせる初山に比べ、五十川の行射には良くも悪くも獣じみた強さ、勢い

がある。二十キロの弓を震えもせず引き絞り、会、放つ。ひととき大きな音が響き、周囲の目が注がれる。霞の真ん中に深々と矢が立っている。五十川の顔に控えめだが明らかな笑顔が浮かぶ。

（笑っちゃだめだろう）と、思わず木藤は目を逸らした。つまらないものを見たというよりも、見事な行射に比して、的を射たあとに笑顔を浮かべるといふ未熟さに、苦しさに似たものを感じたのだ。視線が泳いだ先で、初山も同じように射場を見ていて、その表情は冷たく強張っている。待機室では五十川が行射に感心して身を乗り出す者までいるが、初山はじつとして動かない。それどころか、場を一刻も早く落ち着かせたくて、ことさら静かにたたずんでいるのだ。

就職して十年が経ち、勤め人の生活が身についたところに、なかば強制的にでも、自分を省察できる時間が欲しいと考えるようになった。その思いはだんだん強くなっていく。会社での労働には、組織に対する忠誠心以外にも、個人的な動機が必要であるらしい。そんな不断に業績を上げていく鋭意は、いったいどこで養われるか、そういう問いが近頃、木藤を悩ませていた。直接的な答えはなさそうであったが、省察することには目算があった。かつての自分のどのような瞬間に、そんな時間があったかと考えると、それは学生時代に弓道を習っていたときである。いまでもその効力があるのかは、わからない。

インターネットで「弓道場」を検索してみると、住所から車で二十分ほどのところに道場があり、初心者講習もやっている開放的な組織だという。職場での昼休みにサイトで調べをつ

けて、帰宅するなり妻に話をした。毎週土曜日の午前中に弓道場へ通う、了解を得るためだった。

練習を始めて二ヶ月、酷暑との戦いが必要な季節になった。弓道場へなにか通っているうちに、この道場の核に当たるのは、やはり、初山を措いて他にはいないと思うようになった。初山の行射は特別演武のようなもので、入場から退場まで嫌味なまでに気負いも油断もない。気の抜けがちな矢番えの一つをとつても、静かな緊張をうかがわせる。弓構えから矢を放つた後の残心までは、時間芸術と評しても過言ではない。武道は芸術そのものではないが、初山のそれにはある種の美しさが否定できない。どうすればあのような演武ができるものか、木藤は真剣に考えた。

ただ練習を続けるだけでは行き着けないと思えた。初山の演武の背後には、それを支えるだけの思想があるに違いないと思えた。その思想こそが、木藤の求めるものである。それをもつて、平日の仕事にも身が入るのではないか。木藤は当初の過信を恥ずかしく思い、以降は行射のたびに初山の下へ言葉をもらいに行った。初山の指導は具体的だった。年長者にありがちな感覚的な物言いを、あえて避けていると思われた。最近はその甲斐があつてか、むかし習った所作の一つ一つも思い出され、演武にキレが出たように感じられる。初山に訊くと、「むしろ油断じゃないですか」と、注意を受けた。

「慣れたように感じられるのですが……」  
「慣れるというのはいいことですかね？」  
「うーん、その上を目指せるという意味では」

「あなたは性急ですね。入部されたころの行射には、緊張と気負いがありました。いまはそのどちらも薄まったように思います。気負いはなくしていかなければならないですが、緊張感までなくしてしまっただけはいけません」

「自然な所作を残したまま、緊張できますか？」

「緊張とは、気の張りのことです。体のことではありません」  
木藤は赤面して下がった。

炎天下の弓道場では矢道から湯だつように蒸気がたち、的がかすむ。二十八メートルという的面までの距離は、ただでさえ疲れた目に定めにくい距離である。周囲を見ている部員の緊張感は薄らいでいる。初山のことであるから、例によってそんな空気を払拭しようと、木藤に対しても厳しいのかもしれない。気だるさが漂う中で集中力を絶やしてはいけないのは、初山を除けば、やはり五十川しかない。練習の時間をしばらく過ぎ、部員のプライベートなことも少しずつ耳に入るようになる。五十川についてももうわさが聞こえてきた。何度か話す機会もあった。どのようなグループにも踏み外したところがそれなりにあって、この弓道部にもそれがある。五十川は賭弓をやっている、という疑いをもたれているのだった。そうした不穏さが範士相当の腕前を錬士に留めているらしかった。いったいどのような方法で賭弓ができるのかと、木藤はいつそう五十川の演武を注視するようになっていた。毎回みていると、確かに必要以上に命中にこだわる。五十川以外にも、何人かの部員がそうした傾向にある。それらがみな賭弓に関わっているのか、そこまでわからない。五十川の的狙いも、日によってばらつき

がある。ことごとく外す日でもないではなかった。それが五十川の狡猾なところなのか、それとも賭弓などというのはうわさに過ぎないのか、木藤には判断がつかない。初山が自分の道場で賭弓が行われている状況を見過ごすとは思えなかった。事実を知っているのなら、それに関わる部員を、全員退部させてもおかしくはないだろう。じつはその事実を見つけようと、射場を見ているのかもしれない。

あるとき、道場に四十キロの強弓が持ち込まれた。部員の一人が礼射といって、寺社の行事などで使われるそれを借り受けたのだった。木藤の使う弓は十五キロのカーボン製である。この場合のキロ数は弓の重さではない。弦をひく際の重さだ。審査などにはかわりがなく、あくまで各自が体にあった重さの弓を選ぶことになっている。それでも、一部の競技者は、あえて重い弓を選び、その威力に浸るむきがある。それらは下手であるが、お遊びの楽しみがある。見守るそばから、部員の何人かはさつそく手に取り、その重さに驚きの声をあげる。順番に試してみるが、ともに引ける者はいない。木藤は初山の反応を気にしていた。初山がこうしたお遊びを歓迎するとは思えない。様子を見ると、いつもと同じようにきまった位置で射場を窺っている。ことさら無視している姿だった。色白の四角い頭の中心で、冷めた黒目が光っていて、口元はかすかにゆがんでいる。おそらくは木藤の視線に気づいて、その眉間を緩めると、つまらなげな表情がありありと浮かぶ。木藤の目の前で、強弓は人から人へと渡っていく。そのたびに見知った声の、驚きと笑いが待機所に響く。誰も素直に楽しんでいる。そ

の強弓も、もともと弓道に属して、祭りの露払いに用いられるものである。決して見下げたものではない。たしかに、武道の練習中に、歓声をあげるのとは下手である。真面目に稽古するつもりで来た人間には、迷惑以外のなものではない。しかし、こうしたおもしろみを無視して、ひたすら日常に励むのは、はたして現代的な武道のありかたなのか。木藤はふと靱山の態度を、日常の仕事と連想した。なにが目的であるかはつきりとしていて、それ以外の行動は評価されない。

五十川が更衣室から姿を現した。人だかりをざっと見てから靱山に挨拶する。定位置に座り弓道衣のよれを締めなおす。身支度を整えていると、すぐに強弓が彼のところへと運ばれてくる。だれかその弓を引けるものがあるとすれば、それは五十川以外には考えられない。木藤は靱山の弟子として、もちろんそれは内心でそう思うだけのことだが、この事態を収めるべきではないか、という考えがよぎる。それに抗して、強弓が引かれる姿に魅せられている。自分が余計なことをせず、それから、靱山がこのまま無視していたなら、それは実現する。もういちど靱山を見ると、先ほどと同じように、誰もいなくなった射場に視線を投げて、時間がすぎるのを待っている。五十川はしばらく心を落ち着けていたが、「よし」と、一声かけて立ち上がると、差し出されていた強弓を受け取った。木藤は興味を抑えきれず、靱山への申し訳なさを感じながらも、よく見える場所に歩み寄る。弦すらもいかに太く、硬そうであった。五十川はその撓りを確かめると、射場へと進む。立射だった。胴を作り、矢の羽を握りにあわせる。的を見る目つきにおふぎけ

の様子はない。普段にもまして武者ぶりを感ぜさせるのは、弓の無骨なまでの作りのせいだろうか。矢を番えると、その強弓を頭上に構える。すつと、弓を前に出し、弦はやすやすと引かれていく。(いや)と、木藤はあらためる。いともなげに見せていて、五十川の腕は強い力で震えていた。目線からさらに深く弓を引くと、それは明らかになる。それが、射る瞬間にはびたりと静止した。矢は目に留まらない速さで露的に突き立っていた。中白のわずか右に、羽の根元、いくらか羽すらもめり込ませていく。

「おお」と、部員たちはどよめいた。

見慣れた、聞き馴染んだ物とはちがう強さが感じられた。暑さで火照った肌に冷たい空気が触れたようだった。木藤もまたすがすがしさを覚えた。五十川はもう一本の矢を番え、同じく引き絞ると、的に向けて放つ。再び鋭い風切音とともに、矢は深々と的に刺さる。あまりに勢いが強すぎて、矢は的の中に消え失せてしまった。さすがに気色ばむ者もいた。それはもう武道とは言えない、祭りの有様である。おめでたい、しかし、清澄な雰囲気などない。何人かがその輪から外れ、靱山の近くへと去っていく。木藤は去りがたいものを感じて、もう少し、と残った。そうしているうちに、靱山はいつの間にか帰り支度をしている。さつさと道具をしまい、軽く目札を交わしつつ更衣室に下がっていく。木藤はその姿に息苦しさを感じた。まるで乱れもなく、騒ぎ立てることに苦言もなく、黙って去る。あまりに依怙地であると思えた。

木藤は稽古のあと食事に誘われた。メンバーはかねてから五

十川と親しくしている部員である。木藤が加わることはこれまでなかったが、彼のほかにも何人かのものが、初めて参加するらしく、それは祭りのあとの打ち上げに似ている。

「めずらしいね？」

五十川は木藤に気づいて話しかけてきた。

「いや、今日の見事な射にあやかろうかと……。五十川さんは、消防士をやってらっしゃると聞きましたか？」

「ええ、普段は、弓道衣じゃなくて、オレンジの作業着ですよ」

「弓道はいつから始められたのですか？」

「就職してしばらくですね。もう、二十年以上やってますが、段位はぱつとしません」

「いや、すごく達者ですよ。ほれほれする。私は、この道場では初山さんと五十川さんをお手本にしようと密かに思ってるんです。こんど、ぜひ指導してください」

「そりゃ、いいですよ。僕なんぞでよければ。しかし……」

と、五十川は木藤を値踏みするように見る。

「僕の見る限りあなたはちよつとまじめすぎますね。それもいいけど、初山流は、僕は疲れちゃう。だから今夜はひとつ、酒の飲めるところを見せてもらおうかな」

ああ、そりゃあいいですね、と周囲の人間が賑やかして、木藤の肩をたたく。木藤さんもこれで五十川流に入門ですねえ、と、満足げに顎をしごく者もいる。

（そういう意味になるのか）と、木藤はいまさらながら思った。

初山に睨まれてはたしてあの道場で続けられるか、覚束ない。しかし、五十川たちの間にある、くだけた気安さは、これもまた大きな魅力に思える。周囲に勧められるまま強い酒を飲み、木藤は久しぶりに酔っぱらった。だれかわからない相手の肩に、腕を回すこともあったようだった。シャツの何か所かに料理の油さえ染みている。木藤がなれなれしく周囲に接しているのを、指さして喜ぶ五十川の顔、そんな楽しさを何度か感じた。

そうやって過ごした後、眠気まで感じながら電車の手すりにつかまったとき、何の気なしに見ていた光景が思い出された。五十川が出席した人間の一人から茶封筒を受けとっていた。ちらりと周囲を確認して封を開ける。マイクを握り歌っていた木藤は気づかぬふりをしながらそれを見た。千円札が何枚か、五十川の手元で数え上げられる。渡した男が何か言いながらそれをとりあげ、五十川の懐へと押し込んだ。飲み屋の支払いではない。

翌日からその記憶が木藤を困惑させた。飲み会の時のことも、それ以降、目の前でやり取りを交わすための伏線だったのかもしれない。木藤は苦々しく思った。打ち解けたと感じたものは、霧散していて、近づくこともためらわれる。初山との間にも白々しさが残っている。もうこの道場を見限った方がいいかと考えているとき、初山に声をかけられた。秋口になっていた。食事に誘われていくと、行きつけらしい割烹である。総勢五人であったが、木藤と話したくて誘ったというのが話さずとも伝わってきた。カウンターの抑えた照明のもとで隣

りあつて座り、互いに飲み交わすうちに、しげんと道場の話になる。

「あの人は不純でしょう」と、朧山は言った。五十川のことである。

「実は残念に思っているところでした」

すべて知っているのを感じて、木藤は最近の出来事を話した。朧山はほかの部員にも何度か相談されたことがあるのか、表情を変えずに頷いて見せる。「なぜ五十川を糾弾しないのか？」と、木藤は訊いた。

「糾弾？」と、朧山は初めて見せる人懐っこい笑顔を見せる。間近で見ると年齢相当の皺が目元にうかんだ。

「部員の方はそれぞれ大なり小なり問題を抱えていていますよ。私も営業職で定年まで勤めたから、それはわかります。いまの社会で生活していれば、みななにかしら苦しいところを抱え込みます。そうじゃないと、それも不感症という苦しさです。武道を通じてそれを発散できる人は幸運なんです。できない人もいるのだから。それを知っていたら、なおさら、糾弾なんてできません」

「ご不快じゃないんですか？」

「それは、いいものじゃない。五十川さんみたいな、達人な人が賭弓をやっているのは悲しいですよ。しかしね……」

「しかし？」

「人は変わるものなんです。苦しいことを吐き出せたら、なおさら見えてくるものがあるでしょう。僕はそれを期待したいですね」

木藤は頷かされた。いつしか、同席していたほかの部員も話に聞き入っている。

(自分はやはり、朧山派だな)

そう思いつつ、朧山のタンブラーに焼酎を注いでいく。みな酒豪であった。

再び朧山から指導を受けるようになりしばらくすると、五十川ของกลุ่มはまとまりを失っていった。なにが起きたというわけでもなく、だれが音頭をとったわけでもない。それは朧山の言うように、苦しさを吐き出して、自然と元の鞘に納まったのかもしれない。それが、どうしたのか五十川が欠席を繰り返すようになった。あるいは彼一人が変われなかったのかと木藤は考えた。しかしそれは誤解であるらしい。たまに見かける消防士の姿に、ふざけた様子は窺えない。むしろ以前にも増して鋭く、安定した演武である。弓道の本筋、それを妨げているのは健康を崩したことにあった。

最後は九月だった。弓道教室は休みだったが、どうしても五十川の願いを聞き入れ、範士の朧山が許可を出す。聞きつけたもの数人が駆けつける。木藤もその一人だった。出席した者はそれが五十川最後の行射であると知っているはずである。射場に座る五十川は蒼白な顔をしていた。筋肉ばかりが骨に張り付いて、度を越えて引き締まった様子は、死を連想させた。そこには疫病の神が立っていた。底知れない頑健さを感じさせるとともに、どこを見てもやつれ果てていた。獣のしなやかさが失われ、鉄骨の肢体であるかのような、ぎこちなさが残されていた。そこに過度な力がこもっている。痛みを耐えてい



るのかもしれない。古川は本座から射位に入り、執弓の姿勢をとる。

一矢めをはなつた。二矢め。同じように番え、また、弓をしならせる。緊張の間をとるかからないかの後に、矢を放った。残身。軌跡を見届け、反動で回り込んだ弓を下ろす。みごとに中白を射ぬいている。満足げに目を閉じた。五十川六段、最後の一矢だった。

へ了▽

# 見ていたはずの季節

牧村 拓

春

それはせつせつと落ちる薄墨色の桜

落ちていく花びらを 受け止めてはこぼし受け止めてはこぼし

もう次があるとも思えぬ老木を見上げながら

まばたきをひとつする その半分の半分の時間に

えいえんを感じた

彼ら

列車は左手に桜を置き 右手に町並みを置き

煙を吐くことを忘れたままで 走っていく

行きすぎる公園に見えた 老人と幼子のほほえみ

あるいは彼らもあなれたのだろうか

やはり

夏

それはしくしくと身を責める真黒な夕立

唐突におとずれた雨に 靴も髪も濡らされ

重くなった身体と影をせおい 歩いていく

影は闇にまぎれそうで そっと縮こまって

雨雲なんてひっくり返してやると 空を睨んだ

彼と彼女

晴れ間の見えはじめた空から 顔を出す

恥ずかしがりの光を

逆に抱きすくめるように 歩いて行ったら

彼はどんな顔をするのだろうか

すこしは驚いてくれるだろうか

それとも

閉じたはずの小説が 吹き込んだ風にかかれ

あるはずもなかったページを開く

映じられる様を

見ないように 忘れてしまったように閉じて  
まだ何者にもなれない街へと出る

秋

それはびようびようと風に吹かれる白い街路樹

雑踏をいく人々に 見過ごされ

一時折寄りかかられることの幸せに身を焦がしているのか

イーゼルを抱えた老人が 自分を焼きつかせてくれるよう

絶えず望み 叶わず 葉を落としているのか

その葉を 拾い集めて 焼きくべてあげた

二人

落ち葉が重なって

濡れた地面を覆い隠す

いつかの彼女を思わせて

そうつと枯れた葉を踏みしめた

なのに葉は 声をもたす

だから

あの交差点のむこう 閉じたきりの本屋に

まだあの本はあるだろうか

いつか続きを読めたらいいと思う

でもいつかより少しだけはやく

誰かが手にするだろうということも

とつくにわかる頃だ

だから赤と青の光から離れるよう 背を向ける

冬が僕らのうえに落ちてきた

僕と君のあいだを埋めるように

しんしんと積り出す

いまずぐにでも溶けてしまえばいいのにと

思いながら 叶うはずもなく

はつか煙草に火をつける

春の老桜も 夏の長雨も 秋の落葉も

ともに過ごしてきた僕らだから

最後に訪れた冬の白さに

僕の瞳まで漂白されたような色をしていた

そこに映じられるやわらかな光は

もう影をつくつたりはしないのだと

わかっている

散らかったテーブルの上で

背を上にして開かれたままの一つの小説

読み進められることはない

けれど続いていく物語に

僕はどんな言葉をのこすべきだったろう

わかるまで もうひと連なりの季節を

誰かと巡るなんて できるのだろうか

だから僕の住んでいた一人部屋に火を点けて  
冬を遠ざけ この街を出ていくことにした

へ  
了  
↓

# フ ア イ タ ー

小野寺 那仁

潤が窓の外に目を移すとぼつりぼつり降っていた筈の雨が瀧のように激しく庭のやつでに当たって水しぶきをあげているのに驚いた。これから、また、素早くスタジオまで戻らなければならぬのだと思うと憂鬱な気分になった。彼は立ち上がって窓を開けて水しぶきの源流を確認した。それは雨どいが壊れているに過ぎなかった。土曜日の昼下がりで母親は近所の主婦と話しこんでいる。スーパーマーケットに買い物に出かけるという内容だった。隣の部屋から声が漏れてくる。潤は会話に耳をそばだてていた。潤は、何度も何度も聴いた同じCDをまた初めから再生した。SLAMP CHESTER TONEだ。日本ではいつ発売されるか分からない。発売されないかもしれない。でもネットで検索すれば簡単に出てくる。問題はこの曲が果たして亮介の言うように日本でも受けるのかという点である。とにかくコードを自分のリズムに合体させるんだと亮介はいつになく力んで潤に指図した。どうしてこの曲なの？と

潤と同級生のヒロは間の抜けた顔で尋ねた。いい曲じゃないか！即座に亮介が言った。俺の作った曲に似ているさ。似ていたらだめじゃん。ヒロが言い返す。これを聴け！亮介は自作の歌をギターで歌い始めた。それはRETURNといういつも亮介の歌うナンバーだった。コードはほとんど同じだった。それってパクツたんじゃないの？バカヤロー。いきなりギターで亮介はヒロを殴り倒した。そんなことはどうだっていいんだよ。お前らは俺の言うことだけきいてりゃいいんだ。それきり潤とヒロは黙って亮介に従うことにした。おそらく亮介の仲間がいなくなっただけの原因だったに違いない。

潤がCDを再生しているのは数十万円もする黒光りの光沢のあるオーディオセットである。父親が潤の兄の大学合格祝いを買ってきたのだが、東京大学に合格した兄はせっかくのプレゼントもそのままに、そそくさと東京に旅立っていった。潤は真新しいオーディオのヴォリュームを変えるつまみを何度も右に左へとめぐるしく回転させていた。潤は今更ながら兄と自分に起きることのあまりの違いを肌で感じていた。重苦しい気持ちかぶさってくる。いやだいやだと思いつつもやはり迫ってくる闇の大きな鴉には抗いがたい。だいたいこんな風になっってしまうのにはいつも理由がある。兄はいつも何をやってもたいていうまくいく。それに比較すると俺は何をやっても親の怒るようなことしかできない。こんなことがばれば、また母親は泣くに違いない。だから、絶対にばれないようにやらなくてはならない。

待っていた瞬間はようやく訪れた。ドアが半ば開いて「行っ

てくるね」母親はそれだけ言った。彼の顔さえもほとんど見ることもなくスーパーマーケットに近所の主婦と出かけて行った。二つの派手なパラソルがやつでの合間から見えた。

よし、決行だ。彼は、それまでのんびりと構えていたが、やおら立ち上がって隣の部屋に駆け込んでいった。潤は、そっと母親の箆笥の引き出しから現金を一万円札ばかり三枚ひったくるように抜き取った。返すつもりはなかった。俺自身のためではなく仲間のためなんだからと自分をなぐさめた。いろいろな犯罪者も自分のためではなくて家族や仲間のためにやってしまっただろうな、悪いこととは知りながら。しかし、感傷に浸っている暇はなく、雨の中を障害物レースの競走馬のように庭の置石や植木を飛び越えて母親に門前で会わないために裏口から一目散に走り去った。

ことの発端は昨日の午後だった。いやさかのぼるとはてしなくさかのぼってしまうような気もするが、あまりにもさかのぼって考えると自分が生まれたことが間違이었다ということになってしまうから、適度なところで区切るとやはり金曜日の午後四時を少し、過ぎた頃である。潤は仲間たちとヒロの来るのを待っていた。仲間は三人。レストランの二階が彼らの溜まり場であるスタジオだった。三人の仲間はそれぞれの自分の楽器の調音に余念がない。ドラムとエレキトーンとギター。潤もギターだった。四人ではやる気が起きなかったので練習はしてなかった。潤はヒロの来るのが遅れている原因はわかっていた。一週間前にギターが壊れたと携帯電話に電話がかかっていたのだった。

「練習の帰りにストレンジャーで飲んで、バイクにギターをくりつけたら、転倒してギターがぐちゃぐちゃに壊れちゃったよ」

「ばかやってるんじゃないよ。まったく」潤に言われたくないよな」

先が折れ曲がって弦がぶるんと伸び上がって夜道のアスファルトに横たわり街路灯に照らし出されるヒロのギターが目の前に浮かび上がった。横転した川崎のバイクの横で酔っ払ったヒロが反吐を吹き吹きひざの痛みを和らげようと自分のひざを思い切りさすっている。「それでどうするの？みんな、怒ると思うよ。もう大体、曲も出来上がっているんだから。今度こそはオーデイションで合格するんだって亮介もすごく意気込んでいたじゃないか？」

「わかっているって。お前は今までさんざん俺たちの足を引っ張ってたくせに自分が優位に立つとそんなことを言うのかよ」

「俺と言いついていたって何も話は進展しないぜ」潤は携帯電話を握り締めて大きな声で怒鳴った。

「親にまた買ってもらうよ。六万円くらいでなんとか同じのが買えるから」屈辱的なひとことを引き出して潤は満足した。親に頼むなんてのは本当に最後の最後の手段なのだ。カネなんかあるわけではないのだ。十七歳の俺たちに。

アルバイトをしても五人ともすぐにやめた。少しでもカネが溜まると酒を飲んでしまうかパチンコで費やしてしまった。バンドのメンバーはみんな中学生のころからパチンコばかりしていた。

「金曜日までにはなんとかしろよ。楽器店までつきあおうか？」

「いいよ。ひとりで、なんとかするよ」なかば泣き出さんばかりの声だ。そして、それきり電話は切れてしまったのだ。潤はヒロに何度も電話したり、メールを送ったりしたのだが、何の返事もなく無視され続けた。

待つこと数時間。三人のうちのリーダーの亮介は大学生だ。潤の兄、東京大学に入学した兄の友人なのだ。兄は東京大学とは言うものの文学部の美学専攻で亮介に言わせるとそんなわけのわからん学科に行くのは理解できないということだった。残りの二人は哲とヤマギシ。サングラスを掛けているので顔はよくわからないし、ミュージシャンだからしゃべらないし高校生の潤とヒロには話しかけるようなこともなかった。大学生のバンドに高校生が混じっていることが気にいらぬのだ。特に潤が上手いわけではなく、ヒロが上手いわけでもなく、酔った勢いで亮介が同級生の二人を殴ってしまいメンバーが足らなくなったので補充したのだ。おそらく、その二人は外国の曲を借用している亮介の曲が気に入らなかつたのだと思う。亮介は楽器に関してはいろいろと詳しく作曲もしていた。もう二〇歳になりそうだったのでプロデビューはおぼつかなくてもライブハウスで唄うくらいはしたかったがなかなかメンバーに恵まれなかつた。哲とヤマギシは亮介のパチンコ仲間で潤は店で時々会っていたが、彼らは三人で固まってひそひそ話をしていて潤やヒロのことなんか知らん顔だった。

約束の時間の四時はとうに過ぎていた。亮介はいらいらして

いた。

「ヒロのやつ、何考えてるんだ。ぜんぜん来ないじゃないかよ」低いドスの効いた声だ。あどけなさがないにあらわれている潤は蒼くなり困惑の表情を浮かべた。ヤマギシはスキンヘッドであるし、哲は鼻の下にちよび髭をはやしていた。おっさんの集団だなあと潤は思った。本当に大学生なのだろうか？キーボードとドラムもいまひとつのできであてにならないか

った。が、そんなことは口にはできなかつた。亮介に言わせると本当の天才はおれだけでキミたちは俺様の引き立て役に過ぎないんだよということだった。でも、潤は亮介の秘密を握っていた。亮介は自分では曲を書いてはいない。本当は、倫子が書いているに違いない。なぜなら、はじめての曲ができるまで倫子が亮介によりそっていろいろと教えている。亮介は顔をあからめドギマギとしている。だが、今回のRETURNはどうやら倫子に関わっていないらしい。亮介はもう倫子の曲ではダメだと思つたのかもしれない。倫子も兄の同級生で何度か家に遊びに来ていたから潤の幼なじみと言えた。潤をこのグループ「ファイター」に引きずり込んだのは亮介ではなくて倫子だったのかもしれない。なぜ「ファイターズ」でなくて「ファイター」なのか亮介に尋ねたことがある。亮介は笑いながら言つた。

「いいところに気づいたな。それはキミたちはファイターがないからそのうちにいなくなるかもしれないが真にファイターがあるのは俺だけだからさ」「あ、そう」短く潤は言つた。あきれて何もいえなかつた。大学生なんてまったく好き勝手にやっているなあと思つたがこの三人は贗大学生かもしれない。彼らは学

校にほとんど行かず。パチンコとバンド練習しかしていないからだった。

日差しが消えて黒くなった扉から光が漏れる。「来た」と潤が思うと、やはりヒロだった。

「何してたんだ。遅いぞ。」亮介が怒って言う。

「楽器は？壊しちゃったんだろう。新しいのは買ってきたのか」ヒロは答えない。「何にも言わないと、やばいぞ」と潤が諭したがもう既に遅かった。亮介が足を払ってヒロは床に横たわって腹部と頭を亮介に蹴り飛ばされた。背の高いヒロが無抵抗に横たわる姿は哀れでもあり滑稽でもあった。「おいおい、暴力はいけないな」スキンヘッドのヤマギシは意外と真にやさしさのこもった声で言った。「亮介、子供を虐待して何が面白いんだ」今度は哲がしらけ切った口調で言う。亮介は苛立ちを隠せない。部屋の中を歩き回る。

「そういうことなんだな。結局は、カネが用意できないから、エレキが買えなかったってことなんだ。簡単じゃないか。なんでそんなことも説明できない。バカじゃないの。それならそうとこっちだつて考えるに決まってるだろう。時間を無駄に潰すんじゃないよ」その言葉と裏腹に明らかに亮介には親しさを感じるものの出来ない冷たさがあった。

「お前、高校生をいたぶって……」ヤマギシは何度も繰り返した。ヤマギシと哲はヒロを抱きかかえて身体をさすって椅子に座らせた。ヒロはそれでも口元を歪ませて反抗的な態度をとっている。

「お前らはな、遊びでやってるかもしれないけど俺たちはまず

はライブで唄いたいんだよ。潤もなあ、兄貴は東大にはいつているのにそんなこともわからないのか？本当に兄弟なんか。成績悪いしなあ。」潤はニヤニヤと笑っていた。兄と比較されることはもう慣れた。幼い頃からずっとだ。しかし、今日、初めて気づいたこともある。亮介も兄と友人なので自分の兄には負けたくないところひそかに思っていたのだ。でも、それは間違っているよ。勝てるわけではないよ。と教えてやりたくなつた。潤は何度も試みて失敗を繰り返してきたからだ。兄がクラシックばかりきいているので対抗してロックバンドを始めた。

それは、今にして思えば亮介もそうだったし、ひよつとすると倫子もそうだったのかもしれないと潤は思った。兄の下宿に先月、遊びに行ったときも書棚には美学関係の本がぎっしりと並び、シヨスターコーヴィツチというクラシックを聴いていたが、そんな作曲家はバンドをやってる潤でも知らなかった。ぼんやりとそんなことを考えながら潤は倫子にメールを打っていた。亮介をなだめてヒロを救い出すにはそうするしかないと思つた。「助けてよ。ヘルプ。また亮介が暴れているんだ」携帯のメールには定型文でそうはいっている。送信するとすぐに返事が戻ってきた。「今、すぐに行くよ。場所はスタジオ？」

「そう。」とだけ打つ。電話で話せば亮介は怒りだすだろう。

よくわからないが亮介と倫子はたぶんつきあっている、潤はそう感じていた。むんむんする熱くてたまらない夏の昼下がりにスタジオの奥に人影があるとも知らずに入り込んだとき熱い吐息と言葉にならないような声があわてて扉を開けて逃げ出したときに玄関をそつと見やると亮介の大きな、泥のついた



スニーカーと倫子の赤いエナメルのハイヒールが無造作に並んでいたからだ。潤はぎよつとしたが、面倒なことに関わりあいたくなかった。

ヒロの様子がおかしい。ふだんなら少し態度の素直ではないヒロでも殴られるとおとなしくなり、従順に謝るのだが今日はなかなか抵抗して依怙地になっている。それが、余計に亮介の気分を害している。雰囲気が哲やヤマギシにも伝播して彼らも変なやつだなあと言い始めている。確かに約束を破ったヒロが悪いのだ。楽器を準備できないのなら亮介に相談すればいい。六万くらいのカネがなんともならない亮介や倫子ではなかった。高校生がそこまで見栄をはることもない。頼んでバンドに参加させてもらっているのではなく、頼んできたのはメンバーを失った亮介たちのほうだからだ。亮介は、いろいろと悪知恵がはたらく。潤のマスクが甘いのとヒロも高校生離れした彫りの深いマスクであるのに目をつけた。ヒロは野球部だったから筋肉が発達していた。彼は、眼を悪くしてしまい練習で何でもない球は落球するは、打撃練習をすれば一年生のあらゆる球にもバットが合わなくなり空振りばかりしていた。それで野球が嫌になってやめてしまったのだった。観客を、特に女子の高校生や中学生を誘うために、潤とヒロをバンドに参加させていた。闇の中から虹のような光とスモークとヒロがあらわれ、唄う時には汗で身体が黒光りするようでセクシーだった。潤がそう感じたのではなく、それは、倫子の趣味であったし、夏休みのポップジャムで「ファイター」が観客の大歓声の中、最後までテンション高く唄い終えることのできたのもヒロと潤の活

躍が大きくものを言ったのだった。

潤は、ヒロに近寄ってたぶん何か隠しているだろうと思いき早く全部言えよ。といった。ヒロは驚いたような目をしていたが、なんとなく潤にはわかった。どうせ、また、馬鹿げたことに決まっていた。ヒロや潤の周りで起きることは馬鹿げたことか感動的なことだけだった。それは、振り子のようにかたみにやっできた。

「わかったよ。もう何でも話すから許してくれよ」観念したヒロは泣きそうな声で言った。黒い扉がその言葉を待っていたかのように開く。みな、誰だろうとそちらを注視する。思ったとおり倫子だった。真っ赤なつるつるした皮のジャケットに白いミニスカートでよく焼けた細い茶色の長い脚が扉を開けて立っている。「どうしたのよ。練習しているんじゃないの？」亮介がにやにやしながら倫子をさえぎる。「ちよつと大切な話をしているからアンタは黙っていて」亮介が近寄ってくる。「じゃあ、言いな」

「カネは親にもらったんだよ。来月分の小遣いなんだ。でも三万円しかなかった。」

「それで」

「倍に、すぐに増やさなければならぬからパチンコに行ったんだよ」潤はすべてを理解した。そういうことか。やはり、くだらないことだな。

「それで」亮介はつまらない男がよくやるようにわかりきったことをくぐくぐとくぐくぐとヒロに尋ねた。もう言わなくてもわかってる。

「全部なくなつたに決まつてるじゃん」すでに固めていたこぶ  
しで亮介は思い切りヒロを殴り飛ばした。「何するのよお」ハ  
イヒールを脱ぎ捨て部屋の間隙にまで飛ばされたヒロを倫子は  
あわてて抱きすくめる。頬は次第に腫れ上がってきて唇の端が  
切れている。「パチンコで儲けようなんて。そんな金で楽器を  
買おうなんて根性が腐つてやがる」

「何を言つてるのよ。亮介だつてパチンコばかりやつてるく  
せにさ」倫子が言う。

「俺はパチンコで勝つて楽器を買おうなんて思つてやつてな  
い。それなら三万で買える楽器を探すべきだったな」

「そんなの中古しかないよ。」ヤマギシが言った。「仕方ない  
じゃん。買つてやりなよ」哲が亮介に言った。「いいよ、カネ  
ないし、時間もないから。そんならこいついらぬよ。もう、  
クビだ。もう来なくていいよ。」

「そんな。もう時間も無いのにメンバーなんてそうそう簡単に  
見つかるものじゃないのよ」倫子はハンカチを取り出して不自  
然なほど身体をびったりとくつつけてヒロの口元をきれいに拭  
いている。

「それなら倫子が楽器を買つてやればいいだろう」亮介はあつ  
けなく言う。

「また、私にお金出させるつもりなの。もうかなりいろいろ出  
しているのよ。私にキャバクラで働かせたいの？」カネのない  
バンドはメンバーの彼女をキャバクラやヘルスで働かせている  
そうだ。それも亮介から聞いた。そこまでやるか、と潤は思つ  
た。潤は倫子の身体ばかり見てしまっていた。下半身が熱くな

つて膨張してきた。あわてて、みんなに気取られまいとしたが  
倫子がこちらを見てにやつているように思えた。

亮介は、仁王立ちして腕組みをしていた。そして、思いついた  
ように言った。

「パチンコで取られたカネはパチンコで取り戻すしかないだろ  
う」みな一斉に笑つた。

「どの店？またサンライズに行つたのか？」ヤマギシが聞く  
とヒロは小さく頷いた。

「ふうん。サンライズねえ」ヤマギシがニヤニヤと笑うと哲も  
不気味に笑つた。

笑つてないのはヒロと倫子だけだった。倫子が気に障つたら  
しく口にした。「余計に傷口を広げるだけじゃないの。第一、  
元手はどうするのよ。」「だから、絶対に大丈夫な方法がある  
のだつて」「あるわけないじゃん。そんな方法があるんだつた  
ら、何で今まで負けてるのよ」外国タバコにジツポライター  
で火を点けながら、亮介は言った。「倫子はここにいればいい  
よ。哲とヤマギシは絶対に必要だから。ううん。やつぱり全員  
必要だな。ヒロは、負けた張本人だから今度はしっかりと働いて  
もらわないといけないからな」自分の吸つていたタバコを亮介  
は倫子に吸わせた。情夫気取りだなあと潤は思った。

扉を開けて哲とヤマギシは嬉しそうに出て行く。ヒロの片手  
を取りいくぞと促した。ヒロも細い糸のような希望を見出した  
のかすつかり行く気になつていた。「じゃあ、本でも読んで  
よ」と倫子は詩集を取り出してソファに寝転んで読み始めた。  
コトリとハイヒールが片方脱げて床に落ちる音がした。

扉を開けると雲の様子から何から一変していた。雨が叩きつけられるように降っている。

鈍色の空から夏の雫が搾り出された。亮介が叫びながら走り出した。金色の頭髮がライオンのようだった。その後ろを潤がヒロが走っていった。スキンヘッドと哲が後に続いた。五人はびしょぬれだった。赤い階段を駆け下りて駐車場に置いてある哲の車に急いで乗り込む。

冷たい！と口々に言う。ドラム缶が何本も置いてある。油をこぼしたあとの黒い染みがだんだんと水たまりを作っている。乗り込むときに「ダーツ」と言った。それは潤の声だった。

「今、なんて言った？」ホンダシビックの壊れかけの扉を閉めるときに亮介と哲が口を揃えた。「ダーツって言っただけだよ」また、殴られるのか？そんなくだらないことで殴られていたら命がいくらあっても足りやしない。「何か、亮介の気に入らないことでも言ったの？」潤は呼び捨てにした。それは、外国人は「さん」付けにしないからロッカーは外国人にならなければいけないからまず「さん」「くん」は禁止だという亮介の妙な信条からみんな年齢は関係なくお互いは呼び捨てにしていた。しかし、亮介は車の中でしつこく「ダーツ」について尋ねてくる。「どうしてエリオットの詩を潤は知っているんだ」

「知らないよ。兄貴は読んでいたかもしれないけど本もあるかもしれないけど俺は知らないよ。興味ないから。」「じゃあ、なんでその言葉が出てくるのよ」「言うでしょ。普通」「言わないよ」哲とヤマギシが口を揃えた。「変なやつ」ヤマギシが

言った。「じゃあ、どういうことか説明してやる。エリオットの「荒地」という詩の中にさっきの言葉が出てくるんだけど。

そのエリオットの詩集は今、倫子が読んでいる本なんだ。」

「ああ、さっき読んでたなあ。それがどうかしたの」亮介は怒ったように言った。「何、とぼけているんだよ。あの本はお前が倫子に渡したんだろう。お前、倫子とどんな関係なんだ？」哲が黙って急に車をバックさせるから、後部座席の三人は頭をぶつけそうになった。「どうでもいいじゃんかよ。」哲が言う。「確かにエリオットに出てくるよな。でも偶然だってこともありうる」「哲よ！偶然なんてこのバカの潤にはありえないよ。エリオットの詩を読んでいたら思い出したんだ」潤は確かめるように言った。「倫子がそういつてた？」「そうだよ」兄貴が渡したんだな。潤はそう思った。亮介はもう東京に行つた兄貴のことなんか忘れていた。でも、ひそかに兄貴と倫子は交際している。それなら、何の不思議もない。しかし、話がややこしくなりそうだから黙っていた。亮介は嫉妬深くねちっこいのだった。

ワイパーは絶え間なく動いていた。潤が黙り込むとようやく亮介もあきらめたのか何も言わなくなった。すかさず哲が亮介に訊いた。「ところで、パチンコで金もないのにどうやって勝つのか？」前部座席に哲とヤマギシが後部座席に潤と亮介とヒロが座っていた。雨に気をとられて座る順序など考えていなかった亮介は、後部座席の真ん中に座っていかにも窮屈そうであった。

「それを言う前に確認しておかねばならないんだけどさ俺を裏

切らないと誓えるか？」亮介はやせこけた沖繩のシーザーのよ  
うな顔で交互に潤たちをにらみつけた。潤は思わずうなづき  
「裏切らない」と言った。潤は自分の倫子の身体への興味を見  
抜かれたのかと気づいてドキリとした。勘は、なかなか鋭いの  
だ。数秒が過ぎた。それでも、長く感じた。哲とヤマギシは簡  
単に首肯するのがバックミラーでわかった。同時に亮介はヒロ  
の方を向き直って確認した。「お前のためにやるんだぞ。わか  
っているのか？」ヒロは殴られたこともあり亮介に対して不信  
感を拭えないでいる。やめようかどうか迷っている。もともと  
ヒロはいいやや参加していたのだ。けれども、「うん」とうな  
づいた。しかし自分が引き起こしたのだから参加しないわけに  
はいかないだろうと潤は思った。

ようやく亮介は安心した。そして大きく息を飲み込んでドキ  
ドキしているのが伝わってきた。「別に、悪いことをするわけ  
じゃないんだぞ。今回のと今までのを少し取り戻すだけだ  
よ。」「かなり悪いことをするみたいだな」ヤマギシは不安そ  
うにしかし、何か冗談っぽく言う。外観はいかついこの男ははっ  
きりと自分の意見を言うことはない。しかしひとたびドラムに  
触れると情熱的に叩きまくりにやら怪しげな音が立ち上って  
くるのだった。「どこへ行くんだよ？」そろそろ街に近づいた  
ので哲が尋ねた。「サンライズホームランでいいんじゃない  
の。リベンジの逆転ホームランだな。」「それはそうと、どう  
やって確実に勝つのかそろそろ説明したらどうなんだ。えら  
く、もったいつけるよな」

亮介は哲と顔をあわせてニヤニヤ笑った。そして潤とヒロに

向かって言った。

「俺がスロットを打つから。お前らドル箱をもつてこい。でき  
るだけぎつしり詰まっているやつだ。」

「持ってくる？どこから？」潤は聞いた。黙り込んでいる。ヒ  
ロもヤマギシも。

「他の客の箱に決まっているだろう！」え、泥棒？……する  
の？潤は声にならない。

「そりゃ、見つかったらひどい目に遭うぞ。」

「そんな悪いことはやめたほうがいいよ」哲とヤマギシは反対  
した。だが、目が笑っている。

「話を聞いてしまった以上はもうお前らはみんな共犯なんだ」  
潤は上手く行きそうな気がしなかった。はなから亮介のやるこ  
とはいつもどこか間が抜けていてとても成功するようには思え  
なかった。でも、面白そうだなとは感じた。いつも、パチンコ  
屋ですつてばかりいるからたまにはいいんじゃないかとも思っ  
たし、復讐の意味もあるなど思った。そういつた気分は哲やヤ  
マギシにもすぐに感染した。まる一日中引越しのアルバイトを  
して一万円の日当をもらってパチンコ店に走りこんで三十分で  
二万円やられたことなど、この五人は日常茶飯事であった。そ  
うした過去のとても悔しい思いが狭い車内の中ですぐに充満し  
た。

「哲とヤマギシは見てりやいいよ。いるだけでいいよ」二人は  
それを聞いて安心したようだった。

「ドル箱は一箱二万円。俺と潤とヒロで一箱づつ持ってくれば  
六万円になるよ」「むちゃくちゃだなあ」

「換金するのは難しいのじゃないか」「大丈夫だよ」亮介は自信満々だった。前にもやったことがあるんだと潤は思った。まったく、とんでもないやつだ。亮介はタバコをすい始めた。「どうしてヤマギシはやらないの」潤が自分が実行犯になるのが嫌でそう言った。「ヤマギシはスキンヘッドだから目立つんだ。哲もひげが目立つ。お前だったら大人しそうな美少年という感じで店の中では目立たないし、そんなことをするようにも見えないからなかなかいいんじゃないのか」亮介が、もつともらしいことを言うので潤は納得してしまった。ええ、俺がいちばん危ないじゃんかよ。潤は不満と不安を同時に感じた。

パチンコ店サンライズホームランは郊外の大形店舗だった。看板の一番、端に駐車した。すぐに逃走できるようにだ。何食わぬ顔で出てこられればそれに越したことはなかったが。運転手の哲が捕まると車を押さえられてしまうので哲は店内の入り口に待機していることにした。もちろん全員、携帯電話がすぐにつながるように確認した。サンライズホームラン会館は土曜日ということもあって人が多かった。

亮介は余裕の表情であった。五分で決めてやるぜ、と彼は言った。

車を駐車させると五人は斉に店に駆け込んだ。約束通りに哲を入り口に残して四人はスロットコーナーへ行き店内を物色した。いきなり、一箱のドル箱をよいしょと亮介は下げあげた。ヤマギシ、潤、ヒロは啞然とした。ヤマギシは逃げるようにメダル交換の機械へ身を潜めた。

床においてあるドル箱の持ち主はトイレにいったか携帯電話

で話している最中に違いなかった。パチンコ店の客は意外とせっかく出したドル箱をそのまま置いている人間は多い。店員も暇ならば誰かに盗られないか注意しているだろうがこれだけ混み合っていると気にもとめないかもしれない。だいたい一箱ぐらいでは、そのまま打っていけば、また台に飲み込まれてしまう可能性が大きいのだ。ゆっくりと、何列も離れた別のスロットコーナーまで亮介は歩いていった。潤とヒロとヤマギシは後をあきれながらついていった。亮介の言ったようにスキンヘッドのヤマギシを客はちらりと見るがいかにも怖そうな気配を漂わせているために見てはいけないものを見たという様子ですぐに目をそらしてしまう。空いている台に亮介は座った。満足げではあったが、「どうしてやらなかった？」と言う。店内は大音響なので声が聞こえない。「え、もうやるの？」「おい、俺の取った客が気づいたら店員に言うぞ」それを訊くと潤は気持ちが悪くなってしまった。「早くやるんだ」ヒロは先ほどのコーナーに走っていった。潤もそれをみてしびしびヒロについて行った。三箱出しているのと一箱出しているのと貰うのならどちらが安全なのだろうか？潤は考えた。もちろん一箱の方が危険であるが、あったはずのドル箱がなくなればトイレから帰ってくる場所を間違えたと思う可能性はある。潤はとっさにそう思い、その場にあった一箱を手にした。隣に座っていた男が潤を見た。もし、トイレに行った人物の仲間ならすぐに犯行がばれてしまう。瞬間の勝負であり、運でもあった。男は、一瞬、潤を眺めただけでまた、スロットを回転させはじめた。潤は助かった！ついでにと思った。ゆっくりと箱を持ち上げて亮介の待

つコーナーに戻る。箱を持つての移動やもう換金する客は箱を持って歩いているのでその行為自体は不自然なものではないのだった。ちらりと目を元の通路に戻すのを見るとヒロが盗む瞬間を見てしまった。

亮介のところに戻るとすぐにヒロも戻ってきた。「やったなあ。そら、みろ。楽勝じゃんかよ。五分もかかりやしない」潤は心臓が破裂するかと思うくらいにどきどきとしていた。

「三箱かこれじゃ、六万だなあ。ベース買って終わりじゃん。もう一箱やらないか。潤行つて来いよ」まさか、ムリだと潤は思った。「早く行けよ、お前が一番目立たないから。ほら」亮介は腕を強く掴んで犯行を促した。ドキドキは収まらなかつた。むしろ、その快感はようやく今始まったばかりなのだという気がした。危険を忘れて快感を貪るのなら十箱でも二十箱でも盗むことは可能だった。潤は亮介よりも日常では味わうことのできない快感に促されて再びさきほどの通路に向かって走り始めた。

なんだか、さきほどの目があつた男、サラリーマン風の気の弱そうな男がまだ打っていた。同じ台にすわっているのは当然じゃないか。あれから二分くらいしか経過していない。でも、そいつが邪魔で邪魔でしようがない。そいつは潤がドル箱を下げるのを見ていたからだ。

それでも、潤が来るとすぐにやめてどこかへ行ってしまった。同じ通路ではよくないなと潤はそのときはじめて思った。一列隣の通路に場所を変えて、今度は何気なしに無造作に数箱も積まれているドル箱を掴んだ。そして持ち上げ通路を横切っ

た。「また成功したな」と思ったまさにそのときにまたサラリーマン風のあの男と目が合った。彼は、台を探して通路をうろうろとしていたのだ。そいつの目は「お前は泥棒だ」と確信した目だった。「やばい」と潤は思う。もうその男を気に留めている場合ではなく、亮介のところへ一刻も早く逃げ帰りたい。彼は歩調を速めた。よろよろと最後の通路を横切つて亮介の顔が目に入る。喜んでいる。競馬の第四コーナーを曲がつて直線に先頭で駆けて来たような気分だ。亮介が「ブラボー」と叫んだときにヤマギシが持ち場を離れて遠ざかるのが見えた。同時にヒロと亮介の表情が激しく歪んで何気なさを装いゆつくりと歩き始めるのが見える。後ろからつけられているのか？仲間が歓喜の中で迎えてくれると信じていた潤は自分が不吉な者たちを背後に背負っているからに違いないと悟った。

「ちよっと、お客さん」と店員が声をかけるかけないかの一瞬に潤は持つていたドル箱をその場にぶちまけた。潤はすばやくコーナーを走りぬけた。「こらあ」普段丁寧な口調の店員の声が禍々しく低音に変化するときにはそれはほとんど聞き取れないくらいの小さな声だった。そして潤は一目散に走った。携帯に着信が矢継ぎ早やかかってくるが今はそれどころではなかった。ようやく店外に到達した。しかし、スピードは緩めずに駐車場を眺めた。ホンダシビックに仲間が乗り込むのを見た。彼らは乗り込むと同時に車を走らせ逃走した。

走りながらそれに向かうと全員つかまってしまうのは潤にもわかったので逆の方向に向かった。そして、反対側から逃げ出そうと思ったが、よく見ると誰も店内から追いかけては来なか

った。「助かったな」と潤は思った。それでも、念のために全速力で隣のスーパーマーケットに逃げ込んだ。何をどうしたのか覚えてはいなかった。身体は正直なものでドクドクと心臓が脈うっている。店員には顔を見られていないので店員もあきらめたのだろうかと思った。サラリーマン風の男にしたって自分の金ではないからなんとも思っちゃいないだろう、ただ不正が許せなかったのだろうか。また、携帯に着信がはいった。今度は出た。亮介からだった。「おい、大丈夫か?」「逃げ切った、先に運んだ三箱は換金したの?」「するわけないだろう。そのままおいてきたよ。」「あーあ。今スーパーの駐車場にいるから迎えに来てよ」全身の力が抜けるとはまさにこういうことだ。息せききって駆けて来た。まったくついてないよな、と潤は思った。

結局、また、亮介は潤に責任を押し付けてきた。潤は失敗の代償に土曜日までに六万円を用立てすること約束させられた。潤は、亮介の考えが上手くいかなかったことに内心、安堵していた。親の金を盗んで渡すことで五人の罪が消えるのならそれも仕方がないかと思ってしまった。スタジオに土曜日に集まり金を渡すと、しばらくして倫子がまた、昨日と同じ赤いドレスを着て現われた。

「まあ、悪く、思うよな。俺たちのバンドが成功すれば一番の功労者は潤なんだから。きつとうまくいくよ、なあ」亮介はえらく上機嫌だった。「ごめん。一回は成功しても二回めは難しいよな」ヒロは人が変わったように潤に対して従順になっ

た。倫子も事情を知ったらしく、潤には優しくかった。すぐにヒロは新しいベースを買ってきて五人は練習に打ち込んだ。潤の行為は仲間を結束させたのかもしれない。ドラムを叩く、スキンヘッドからも汗がしたたり流れていた。そんなヤマギシを見るのは潤は初めてだった。潤は、しかし、あんな子供じみた窃盗をいい年をした大学生がするだろうか、という疑問だけが長く残った。あれは、一種のいたずらだったのではないかとも思った。大体、一日に数万もパチンコで負けている亮介や哲にしてみれば六万くらいはたいした金額ではないはずだ。やはり、高校生だからなめているのじゃないかと思うと憤りが込み上げてきた。「馬鹿にしやがって、今に見ている」とギターをかき鳴らし声を張り上げながら潤は思った。三時間も練習しただろうか。「今日は、終わりだ」と亮介はいつもと同じように誰にも相談せずに自分のテンションでやめてしまった。亮介がリードヴォーカルで潤もヴォーカルであった。亮介は歌に関して、まあ、上手いほうだと潤は思ったが、なにぶん潤の声は身体が小さいこともあって声がよく出ないのだった。マイクや音でごまかしてもいかんともしがたい。本当は歌は亮介よりも上手いのだが、と潤は自分でもそう思っていた。亮介は、太い野生にみちた若きけだもののような声をしていた。女性にも人気があった。子供こどもしていかわいいという理由で潤やヒロも人気はあったがそれはあくまでもアイドルとしての人気であった。亮介に身を任せたいと思う女は数知れなかったが、妙な評判になってもいけないので亮介は我慢して倫子以外の女とは一応、大っぴらにはつきあわなかったが、亮介のことだからみ

なの知らないところで何をしているのかはわからなかった。練習が終わると亮介はいつもの居酒屋へ行く。潤もたまにはつきあったし、ヒロはよくつきあっていた。

その日、いつものように亮介にくっついて居酒屋へ向かおうとする。潤が潤の腕を掴んだ。強い力で引く張っている。

「まだまだ声が出ないでしょ。あなたはこれから私と練習するのよ。」それは、倫子の言う通りなので潤は黙って従った。

ぞろぞろと仲間たちが、外へ出て行く。後に残されたのは潤と倫子だけだった。「話があるの」と倫子は言った。いったん外へ出て行ったヒロがまた、戻ってきて、何か言いたそうな顔つきであったが倫子がさよならと手を振ると何も言わずに去っていった。

「一応、鍵をかけるわね」倫子は鍵をした。

「時間は？」

「管理人が来たら、たぶん来ないと思うよ。ソファにかけたら。」しんと静まり返った部屋は先ほどの喧騒を飲み込んでしまった。いつも、薄暗くしている。照明は練習が終われば消してしまふ。潤は潤の手を握ってソファに横になるように促した。汗ばんでまとわりつくようにねっとりとしたそれでいてきめのこまかい手の感触に思わず潤は手を離そうとしたら今度はしつかり握られた。潤は年上の女は苦手だった。どこか、自分を物質のように眺めているような視線を感じるのだ。その時、倫子は、濡れたストロベリーのような、膨れ上がった唇を耳に押し当てるようにして囁いた。「潤。お金ありがとう。もし、あなたが持つて来てくれなかったらまた、あたしが、たて

かえないといけないうところだったの」潤は、今こそ、真実を言つてやるべきだと思つたが、ぴつたりと寄り添う倫子の肉体が次第に柔らかな塊に変化していくのを感じ取つた。今、あのお金は、母親の財布から引き抜いてきたといえ、たちまちにして倫子の身体はもとの棒のような固さに戻ってしまうだろうと思つた。潤はウソをつくのには慣れていた。「一万円の元手でスロットがかかつて六万円になったからすぐにやめてきたんだ」「すごいじゃん」それが、合図だった。倫子は、潤の耳を吸い始めた。「ちよつとそこはこそばゆいからやめて」今度は倫子は潤の口を手で塞いだ。「かわいいわねえ」倫子は、スカートの方を半分、おろした。「女に恥をかかせないでね」と言つて潤の手をスカートにもつていった。「どうするの」「見たいでしょ。あたしの身体」潤はため息と吐息で頭がくらくらしてきた。潤が、ぐずぐずとためらっているの、我慢できない倫子は潤の口の中に唇を押し付け舌をからめてきた。口紅のごきつい味が潤の口の中で広がった。数分間のうち、潤は観念した。が最後に訊いてみた。「亮介が、怒ると思うよ。きっと。あの日、エリオットの詩集がどうのつて亮介が怒つていたから。」「そうなの？あたしは、あいつとはもう関係ないの。別れたの。あんな金にだらしない、というか、あたしの金ばかり当てにしてくるの、いまにキャバクラかヘルスで働けて言つてくるにちがいないわ。もう何十万も貸しているのよ。」話しながら倫子は両手でスカートを脱いで、まっしろな肉のうえに青白い血管がうすく浮き上がっている脚をこれみよがしに潤の身体の上に投げ出した。潤にまたがって今度は



上着を脱ぐ。潤は倫子が何を話しても上の空になってしまった。いつのまにか潤も口をだらしなく開け始めた。「あいつは、あたしに貢がせていると勝手に思い込んでるけれどもとんでもないわよ。あの、お金は絶対に、かえしてもらおう。」倫子は半ば、あえぎながら、言った。倫子は知的などちらかといえば冷たい感じのする美しい女であったが、欲情にかられたせつなげな瞳は潤には醜くも感じられた。それでも、冷静なのは視覚だけであった。「潤。あたし、前からあなたのことずっと好きだったの。でも、高校生だから、そんなこといえなくて。亮介は、暴力を振るってあたしを縛り付けていたの。でも、もうあんたも高校を卒業するのだし、亮介は他の女と付き合っているからだいじょうぶなの。昨日の話も亮介からすべて聞いた。あんたにムリなことさせて失敗したんでしよう。途中までうまくいったのに。本当にあいつは何をやってもダメなやつだよ。ね。あたし潤のことを愛してるから」倫子は下腹部にゆつくりと潤の手をいぎなつてさするようにゆつくりと教えた。「優しくしなきゃ。もつと、ゆつくりと。知らないからしかたないよね」音楽が奏でられるような甘い声で言った。「潤もあたしのことを愛しているの？」下着をすべてみずから剥ぎ取ってしまいい汗で濡れた乳房で潤の顔をふさぎながら潤に与えながら倫子は言った。「潤。言つて。あたしのこと愛してる？」「う、うん。今は愛してる」「そう、じゃあ」倫子は潤のズボンを脱がして下半身を裸にして充血した潤のペニスをつかんで自分の下半身にすばやく挿入すると固く閉じ込めてしまった。それだけで、潤はもう射精してしまつたが、倫子は、潤が苦しむのもお

構いなく上下に身体を動かし続けた。潤の肩を強く両手で掴んだ。潤は再び、勃起した。倫子は、胸も乳房も顔も両腕も顔からも汗を噴出していた。潤は気が遠くなりそうになった。

「潤、愛していると行って？」何度も何度も倫子は言うので潤も「愛してるよ。倫子」とよくわからないがままに叫んでいた。髪の毛を直す倫子の仕草がことのほか扇情的に映った。二度めの射精が終わるとまた激しく口をからめてきた。潤はこの儀式はいつになったら終わるのだろうと不安にもなった。

「潤、あなたは大人になるのよ。子供こどもしている。そんなんじや亮介には勝てないよ。」とソファに横たわってストッキングをふくらはぎまで下ろして潤をいぎなつた。潤のペニスを触ると潤の意思とはほとんど無関係にまた勃起した。「潤、男だったら自分で腰をいれなきゃだめ。あたしの肩をつかんで」「そうそうそういう感じ」……そうして三度目の射精は倫子の身体の奥深くで行われた。潤は、もう限界だった。少し、意識をうしなつて倫子の身体びったりとくつついたままで眠っていたのかもしれない。倫子がまた、潤の自由を奪ってふたを閉じてしまったのだった。「あたし幸福よ」と倫子は小さく囁いていた。

その日から熱を帯びた練習が続き、オーディションを受けた。何度か、ライブでも歌った。好評ではあつたが、冷静な判断のできない亮介を別にして、他のメンバーは半信半疑だった。バンドの力量や音楽性とは異なる要素でライブは熱狂することもあるとヤマギシは言った。ヒロや潤はまったく意味がわ

かつていなかった。やがて、オーディションの結果が届いた。バンドとしては失格だった。

ある秋の日の晴れた午後、亮介は仲間を集めた。倫子も現われた。潤と倫子につきあっていた。潤はもう、「ファイター」には、何の可能性もないんだと諦めていた。亮介は、みんなの前で宣言した。「今日で、ファイターは解散だ。残念だったな」しかし、彼は、にやにやとしているので仲間は不審に感じていた。窓から差し込む西日が五人と倫子の長い黒い影を落としている。「俺とヤマギシは趣味みたいなものだったから別にいいけど亮介こそ残念だったな」哲はいろいろなバンドに入ったりやめたりしていたので自分たちの力量がわかっているのだ。「だけど、俺は、東京へ行くよ」倫子はすでに、その、話は知っているらしく薄ら笑いを浮かべていたが、哲とヤマギシは驚いた様子だった。「審査員のプロダクションから他のメンバーを紹介するから東京へ出てやってみないかと誘いがあったんだ。君は基礎から勉強しなおせばまだまだ可能性があるって言われたんだよ」亮介は、うきうきとした様子で話した。よかった、よかったとヤマギシと哲は手を叩いて喜んでいて。三人は喜んでいたが、ヒロはよくわからないらしくそれでも拍手はしていた。が、そのうちに泣き始めた。「よかったよ。本当に。亮介さんだけでも認められて。」だって、お前ら高校生はまだ始めたばかりじゃないか。これからいくらでもうまくなるんだぜ。泣くなって」亮介はヒロの肩を叩きながら鷹揚に言った。潤は、しかし不満足であった。ヒロのように純粹に心から亮介を祝福できなかった。それは、今までの、亮介の生活ぶ

りを見ていたこともあったが彼の音楽の力量もパフォーマンスもぜんぜん納得のいかないものだったからであり、ひそかに、自分の方がもっと練習やいろいろな経験や新しい音楽に触れればすぐにでも亮介など追い越してもっとすばらしい曲を作って演奏して歌えるだろうと信じていたからだ。だいたいあの曲、RETURNはもともと海外の音楽じゃないか！喉元まで出掛かっていたが口にはしなかった。「潤よ。お前は俺の言うこと聞かなかったから仕方ないぞ。俺はきちんと自分のモノにしていただろう。お前は分かっているはずだ。」彼は、潤にはそれだけ言った。

俺は、倫子を亮介から、奪い取った。倫子も亮介に見切りをつけたのだ。俺は、まだ高校生だから審査員も何も言わなかったんだと潤は信じていた。その根拠は、倫子だった。倫子は蒼白い顔をして立っていた。体調が優れない日が多く、嘔吐することもしばしばだった。倫子は思い切り笑顔をつくって亮介に言った。

「はやくメジャーになって私に借金を返してね」みんな笑っていた。「ああ、わかっているよ。何倍も返してやるよ。それにしても、倫子もケチな女になっちゃったなあ。ミュージシャンの言葉じゃないね。それは」どうやら本当に別れているんだとはじめて潤はこの二人の関係の崩壊を知った。「もう明日にも出発するんだよ」亮介は、涙すら浮かべていった。

「また、落ち着いたらみんなに連絡するよ」と言って扉を開けて自分のギターを抱えて先に出て行った。「じゃあな」「さよなら。亮介さん」倫子やヒロは心からそう言っている気がした

が潤はまた亮介には、この街でか、あるいは、東京でか、いずれかで逢うことになるに違いないと思っていた。

それから、また、数週間が過ぎた。亮介についての記憶が潤には薄れつつあった。潤は、バンドもなくなつて普通の進学を前にした高校生に戻っていた。大学受験にはバンドを解散してもらつたのは都合良かった。土曜日の午後、英語のテキストを開けたまま潤は眠ってしまった。秋の日差しは潤の背中を照らしている。携帯に着信があった。出ると倫子からだった。「明日、アウトレットに行かない？ 今度、出来た店よ」「いいよ」そのときまた着信があった。潤は、倫子に待つてもらいそちらの方へ出た。「もしもし、あの長谷川潤くんですか？ 私はロックミュージックの武田と申しますが……」「ええ、そうですよ」「実はですねオーディションのテープをお聞きしましてぜひ、潤くんにお会いしたいうちの社長が言うのでどうでしょうか？」潤は胸が高鳴った。ドキドキとしてこれまでに味わつたことのない視界が開けるような感触であった。「もちろん、お願いします。でも、僕はまだ高校生なんですけど」「高校生のうちからレッスンしている人なんていくらでもありますよ。」「そう。そちらの場所は？」「東京です。また、詳しいことは社長の方から。とりあえずはご本人の意思の確認ということ」で「わかりました」潤も倫子を待たせてあるので、また後から掛けなおせばいいやと思っていた。倫子は、しかし、たいした話もなく電話を切った。しばらくロックミュージックの武田の電話を待ったが何も掛かつてこなかった。

翌日の日曜日に朝早く倫子は真っ赤なびかびか光る車で潤を迎えに来た。ブラウンのブラウスに白いシャツでシックないでたちであった。髪は亜麻色に染めていた。以前に比較してかなりふっくらとしている。潤は二歳年上の倫子の服装にも体型の微妙な変化にもまるで関心はなかった。喫茶店ではモーニングを食べた。「受験勉強は順調なの？」「はいれる所に行くよ。城南大学か産業科学大学か、ロックがダメならコンピュータだ、やっぱり。ゲームソフトとかつくりたいよ」「私の学校は？」「ムリだよ」「ヤマギシや哲でもはいれたのに。」「うーん。意外とあいつら賢かったんだね。」「笑いながら潤は言う。「まあ、別にどこの学校でもいいけど。就職できれば。」「ヤマギシと哲には会うの。」「あんまり会わないね。パチンコでも打ってるんじゃないの。あいつらは何がしたいのかよくわからないから」倫子は、つまらなそうに言った。「あ、そうそう。」「急に思い出したように潤は意気込んで言った。「俺さ、東京の音楽事務所から誘われているんだぜ。オーディションを見てなかなかいいって」倫子の顔色がにわかに変わってきた。「何を言ってるのよ。バカじゃない」「本当だって。携帯に連絡があつて……：……ほら」「そんなの詐欺に決まってるじゃない。最近、多いのよ。スクールに入りませんか？ デビュー出来ますよ。なんていつて親からカネを巻き上げるような連中が。そんなの手当たり次第に電話しているだけじゃん。」「「そうかなあ」それから言い争いになって電話してみることにした。着信履歴に何度電話しても武田は出ない。：

店を出てアウトレットに向かう。倫子の運転する黄色い軽自動車は軽やかにサンライズホームラン会館の前の通りを横切っていく。

「ここで六万円取り損なった。あれってさ、あれ、いたずらだったんじゃないの。僕を嵌めるための。何か知らない？」

「知らないわよ。それより親にお金を返さないといけないね。いつか。いつでもいいから」

高原の樹木にも秋の気配が漂っていた。羊雲を眺めているうちに潤は何をやってもうまくいかないような閉塞感がまた蘇ってきた。やはり、倫子には言わないほうがよかったのかもしれない。アウトレットはいくつかの洋館から重なり合うように建てられていた。ほとんどが洋服ばかり売っている店だ。ジーンズショップに入った。びりびりに破れたジーンズを面白がって倫子は買った。そして潤にも買った。次には早くも冬物、ニットのセーターやカーディガンやブラウスの置いてある店内を見て回った。倫子は、上機嫌だった。

あーあ学校なんてつまらないね。こうしているほうが好きと言った。これから、大学に進学しようとしている潤に向かって大学なんて面白くないのよとさんざん言った。もうやめたいとまで言い始めた。そのうちにベビー服の店に立ち止まった。ピントのフリルのついた小さな小さな服。「かわいい」何度も連発している。家族連れでゴった返している。

「つまらないよ。他の店に行こうよ」何度も潤が言う。実際、他の客は二、三歳のこどもを連れた三〇代から二〇代後半の客がほとんどだった。倫子は機嫌はいいものの身体が重く疲れて

いるようだった。ベージュの子供服を自分のお腹の上ののせた。

「かわいいでしょ。あたしの子供に着せるのよ」

「似合うと思うよ。」潤は無表情に言った。

「やっぱり、あたし、産むことに決めた。」倫子は潤の顔を見つめている。

「はあ？」

「あなたのこども」

「ウソだろう！冗談じゃないよ。」潤はその場に立っていることもできないくらいに衝撃を受けていた。

「お前。それは、亮介の子供だよ、絶対。俺をはめたんだ」潤は真っ赤になっっている。咄嗟に親に知られたらどうしようと思つた。母親や兄も倫子のことはよく知っているのだ。母親は倫子を凄くお嬢さんだと褒めてはいたけれども。こんなことになるのは望んではいないだろう。

「違うわよ。絶対に。亮介の時は、用心して大丈夫な日にしかなかったしピルも飲んでたから。あんたって何にも知らないのね。ちゃんと病院で診察してもらいました。今ならまだ降ろせるけどもうあたし決めたからね。」

潤は涙がとめどなく溢れてきた。

「親になんて言ったらいいんだよ。」

「そんなこと自分で考えなさいよ。あたしは覚悟をきめたわ」  
「嫌だ。いやだ。絶対に嫌だ。」言うなり潤は立ち上がってダッシュと叫んで逃げ出した。嫌なことがあったら逃げ出すしかない。それしかできないのだ。

「どこへ行くのよ。走ると子供に悪いから走れないよ。」潤は泣き叫んでいた。知らずに携帯に手を伸ばした。

「武田よ出るよ。出てくれ」と心の中で武田を呼びながらリダイヤルした。あの日、パチンコ屋から逃げ出すときの何倍ものスピードで俺は逃げていると潤は感じた。その時、亮介の高らかな勝ち誇ったような笑い声が潤の耳には聞こえてきた。

へ了  
▽

# 不思議な運動会

常磐 誠

和真君は気がつくとも運動場のグラウンドに立っていました。でも不思議なことに、なぜ自分がここに立っているのか、まったくわかりません。そこで、和真君は今の自分の状況を冷静につかみ取るため、辺りをきょろり、きょろりと見渡します。

そこで気付きます。走るダチョウ、走るキリン、そして一人の女の子。自分のすぐ横でそのダチョウとキリンを見つめ、気合を入れているペンギンとこれまたキリン。

この時点で冷静かつ頭の良い和真君は気付きました。ああ、これは夢だな、と。

だってあり得ないじゃないですか。小学校の運動場でダチョウとキリンと女の子が走っていて、しかも動物なのにリレーのルール——例えばバトンを持ったまま走るとか、グラウンドに描かれた線の通りに走らないとダメ、とか——を完全に理解し、守っているなんて。

さてさて、なぜ自分がこんなへんてこな状況に置かれている

のか、これから自分がどうすれば良いのかを和真君が考えていると、隣でペンギンさんが唐突に、

「和真君。これは夢じゃないよ」

と話しかけてきました。和真君ビツクリ。

「うわ！ 動物がしゃべった！」

そう言うと、キリンさんも話に乗ってきました。

「何を言っているんだい、和真君、君だって動物じゃないか！ ハハハ。そしてこれは本当に夢じゃあないんだよ」

笑いながらキリンさんも言いますが、到底信じられません。何せ和真君が去年学校の遠足で行った動物園のペンギンやキリンは一切しゃべらず、和真君をはじめとした人間を見つめたり、興味なさげにエサを食べたりしているだけだったのですから。

「いやいや、ウソだよ。絶対。いや、確かに人間も動物だけど……。いや、でもあり得ないって！」

混乱した和真君がそう言いますが、ペンギンさんもキリンさんも引きません。

「いやいや、和真君、君は大人の言うことを真に受けすぎているんだよ」

「そうそう。キリンさんの言うとおり！ キリンさんは良いことを言う！」

「いやいやいや……」

「和真君はいいややって言うのが好きなんだねえ」

「そうそう。キリンさんの言うとおり！ キリンさんは良いことを言う！」

「いやいやいやいや。……あ」

言われているそばから2セットもいやいやと言ってしまった  
和真君ですが、

「あり得ない……。こんなのは、絶対にあり得ない……！」  
まさしく混乱の極み、という感じになってしまっていました。

た。

さて、このリレーなのですが、どうやら二人——二匹、の方が  
良いんじゃないの？ と聞いたたら、

「君は常識に捉われ過ぎだ」

「そうそう。麒麟さんの言うとおり！ 麒麟さんは良いこ  
とを言う！」

と怒られました——の話の聞いていると、自分はアンカーの  
ようです。その証に、和真君の右肩には、麒麟さんやペンギ  
ンさんの右肩に掛かっている物と色違いのタスキが掛かってい  
ます。

「あ、これアンカーの目印だったんだ」

そんなことを和真君が一人つぶやいたちようどその時、リレ  
ーの暫定トップであるダチョウさんが駆け込んできます。口ば  
しに持つバトンの色はペンギンさんのタスキの色と同じ色。

「それじゃ、あっしはお先に！」

ペンギンさんはスタートダッシュ！ ダチョウさんから実  
にベストな位置でバトンを受け取るとそのまま勢いに任せて走り  
出します。

「かずま！ 後は頼んだぞ！ 負けたら蹴り飛ばすからな！」  
ダチョウさんに遅れて女の子がやって来ます。その口からは

結構物騒な言葉が出てきましたが、スルーしましょう。……と  
ころでこの女の子、さつきは結構距離があつて顔がよく分  
なかつたのですが、どうにも和真君と顔見知りのようです。  
どうかこの口調は、和真君のよく知る女の子の声でした。

「え？ 美鈴？ 美鈴も走つてたの？」

そう。美鈴ちゃんでした。和真君と生まれたところから一緒  
いたくらいの幼馴染、美鈴ちゃん。幼馴染が走っていること  
くらい距離があつても気付いて？ 和真君はそれどころじゃ  
なかつたんです。許してあげてくださいお願いします。

「んなことどーでも良いからとつと行けーッ！」

負けず嫌いの美鈴ちゃんに叫ばれ、結果が出る前から蹴り  
飛ばされるすんでのところで和真君は走り出しました。とりあ  
えずバトンを受け取ったからには走らないといけないんです。和  
真君も空気を詰めてます。子どもなのにね。褒めてあげてくだ  
さい。まあ、欲を言うならば、バトンを受け取るのはあともう少  
し走つて自分に勢いを付けてから、がベストなのですが。

さて、麒麟さんですが、やつとバトンを持った走者がや  
つて来ました。来ましたが、今流行りの熱中症にでもかか  
つてしまったのか、もはや走つてすらいません。それでも、走  
者、かッ！ とかそんなスパルタなこと、もちろん麒麟さんは言  
いません。それは今の時代犯罪行為とも取られます。危険です。

そんな優しい麒麟さんは、自分にとつて不利になることも  
全て承知した上で、わざと自分に勢いを付けず、バトンを受け  
取るラインの一番手前でバトンを受け取つたのです。そして、  
「後は私に任せるんだ！」

と格好の良い一言も忘れません。俺とやらなかか？

げふんげふん。さておき、アンカー勝負となった白熱リレー。キリンさんが速い！和真君がテレビで見たキリンさんはもっとゆつたりのんびりしているように見えたというのに。

でも実際キリンさんは速いんです。時速50百くらい出ます。加速性は悪いけれど、時速50百。大自然なめんなよ。

そのスピードでペンギンさんも和真君も追い抜かれてしまいます。その時でした。

「があっ！」

ズコーッ！ペンギンさんは自分も負けじと勢いをつけようとしたところで、転んでしまったのです。立ち起こる砂煙。転がるバトン。その瞬間。

わああああああー！ペンさん！頑張るんだー！ヤマ

ナミさん！ファイトー！か・ず・ま！それか・ず・ま！という周りの応援の歓声が聞こえました。和真君は、周りにこんなにかくさんの人や動物たちがいることに、今やっと気付きました。ペンギンやキリン、そして人間だけでなく、ネコ、キツネ、タヌキ、更には最前列にチーターまでいるではないですか。万物ビックリショーもビックリというなんかよく分からん表現が常磐の頭を過ぎったんですがまあそれはどうでもいいですねそうですね。

しかも人間の方とはよくよく見ると、何と和真君のクラスの友達ばかり。チーターの横には、さっきまで走っていた美鈴の姿も。速いねえ、美鈴ちゃん。

「ほら！お前らももつとちゃんとかずまの応援してやれ！しないと蹴り飛ばすぞ！それか・ず・ま！」

さっきから美鈴ちゃんは蹴り飛ばすぞを連発しているようすがきつと口癖ですねそうですね。男子も一人その剣幕にタジタジしてますが、とにかく応援席の皆はアンカーの応援に必死なのです。

その必死さは和真君にも伝わりました。少しだけ前を行くキリンさん——たしかヤマナミさんでしたね——を見据え、走る勢いを強めます。ヤマナミさんは、今までの時速50百ランのせいで体力を消耗し、疲れを見せています。チャンスです。

そんな時、後ろで転んでしまったペンギンさん——その名はペンさん。そこ。単純とか言わない——は、

「あっしは、あっしはこんなところで負けてはいられないのです！」

と目を光らせます。すごいガッツです。たぶんこの文章がマンガだったら、ここから回想シーンが入ります。

例えば応援席に居て、ペンさんを熱烈に応援している彼女とのラブラブな誓いのシーンとか。ポンポンを持って応援してくれている仲間達との熱い熱い友情とか。

けどこれはマンガじゃないんで入りません。そういうのは勝手に想像してください。いや、別に面倒臭いとかそういうんじゃないんです。断じて。

ああっ！なんとということだ！ペンさん！バトンを口ばしにくわえ、腹ばいになって地面を滑ります！とんでもないスピードです。





「人間の和真君にのみトルソーのルールが適用されます」とアナウンス。

「えー」

もうこれには和真君も言葉がでませんでした。

「まあ、これで皆が1等賞なんだ。君も私も、そしてペン君も一番なのだよ。文句を挟む必要などあるまい。そうは思わないかい？」

「そうそう。キリンさんの言うとおりに！ キリンさんは良いことを言う！」

それが理解できないではないけれど、ちよつとだけ納得いかない和真君はついにペンさんにさつきから思っていたことを言います。

「うん。そうだね。でもペンさんさつきからずっと同じことしか言っていないよね」

「気にしたら負けだよ」

ペンさんの反応は実にあっさりしていました。いろいろと複雑な気もしましたが、和真君は不思議と、まあ、それでも良いか。と思えてきました。

紙吹雪が舞う中、ヤマナミさんとペンさんと和真君は表彰台の上に並びます。3人とも、1等賞。一番高い場所。首から下げられる金メダルを見ると、とてもとても誇らしい気持ちになりました。

「ところでペンさんお腹に怪我とかしてない？」

和真君が一人照れまくっているペンさんに聞くと、  
「優しいんだね。和真君。でも大丈夫さ。……いつまでもそん

な優しい和真君でいてね」

そう言われました。その後、ヤマナミさんも、

「そうそう。いろいろあったが、君のおかげで楽しい運動会だった。和真君、いつまでも、そのままの君でいてくれよ。……本当に、ありがとう」

そんなことを言ってきたのです。まるで最後のお別れのようにではないですか。急に寂しくなった和真君ですが、和真君の意識は、そこでフツと途切れてしまうのでした。

「和真ーっ！ いつまで寝てるの！ もう夏休みも終わるのに。そんなお寝坊さんじゃダメでしょう！」

お母さんの怒鳴り声で、和真君は目が覚めました。やっぱり、夢だった。和真君は起きたばかりの頭でそう思い、とりあえず身支度だけ急いで整えました。

朝食を食べる席で、和真君は口を開きます。

「今日、夢を見たんだ」

「へえ。だから寝坊したって？」

「まあ、そういうことにしておいてよ」

「で、どんな夢だったの？」

「うん。……えー、と」

「何？」

「いや、よく覚えていないんだ。何でだろう？ でも……」

「でも？」

「なんだか、楽しかったな、って」



記録(五月)

連絡事項

- ・大羽左膳が退部しました。(2012.05.12)
- ・とーいが入部しました。(2012.05.13)

◆「月刊 twitter 文芸部」製作メンバー

【通常時】

- ・しろくま (HP 主任)
- 【主任不在時】
- ・小野寺 (臨時主任)
- ・だいぼむ (表紙デザイン)
- ・緑川、小山内 (記事)
- ・その他部員 (フォロー)

◆六月号特集について

六月号の特集はテーマ小説です。テーマは「尊さと卑しさ」(またはそのどちらか)。対象年齢の制限はありません。

活動記録

◆第六回読書会 (東京オフI)

日時：五月四日

場所：渋谷

ホスト：あんな

課題図書：青木淳悟「私のいない高校」

参加者：あんな、小野寺、6、イコ、カヅヤ、牧村、だいぼむ

◆第七回読書会 (東京オフII)

日時：五月五日

場所：渋谷

ホスト：小野寺

課題図書：マルタン・デュガール「生成」

参加者：小野寺、あんな、6、イコ、カヅヤ、牧村、だいぼむ

◆五月定例会

日時：五月十二日 二十一時

場所：skype

ホスト：小山内

参加者：イコ、安部、フランツ、神崎、小野寺、牧村、カヅヤ、Rain 坊、小山内 (順適当。敬称略)

◆五月号合評会 (第一回)

日時：五月十九日

場所：skype

ホスト：牧村

対象作品：

「夜、お話」牧村拓

「双子姫と月の沈む方角」崎本智

参加者：小野寺、イコ、牧村、Rain 坊、カヅヤ、神崎、小山内

◆五月号合評会(第二回)

日時：五月二十日

場所：skype

ホスト：小野寺

対象作品：

「サナギになれなかつたイモムシ」 芦尾カヅヤ

「僕とご飯」 神崎裕子

「セカイの寄り道」 イコぴよん

参加者：小野寺、イコ、牧村、6、あんな、Rain 坊、カヅヤ、神崎、小山内

◆五月号合評会(第三回)

日時：五月二十六日

場所：skype

ホスト：イコ

対象作品：

「いつかの間で。」 牧村拓

「変身現代」 しろくま

「笑い」 大羽左膳

参加者：小野寺、イコ、牧村、あんな、とーい、小山内

## 編集後記

今回は、しろくまさん不在の為、みなさんの力で六月号ができた。ご協力ありがとうございました。

昔、『磁場』という雑誌があつて自分で参加してみないとわからないことだけど雑誌というのはそもそも磁場なんだと思う。誰かが吸い寄せられて輝くというんな人が集まってくる。それぞれに輝こうとする。そしてますます人が集まってくるのだ。

小野寺

月刊 **twitter** 文芸部 六月号 (No.9)

平成二十四年六月一日発行

製作 **twitter** 文芸部

オフィシャルアカウント

<http://twitter.com/twibun>

ホームページ <http://twibun.jimbo.com/>

執筆者 (五十音順)

芦尾カヅヤ @akeriya

小野寺那仁 @onoderak

小山内 豊 @g\_osanai

常磐 誠 @evagredora

牧村 拓 @kawana\_tengo

緑川 @midorikawa\_e

本誌はホームページに記載されている「月刊  
**twitter** 文芸部 六月号 (No.9)」をプリント用に  
編集し直したもので活動報告は未掲載です。記  
事の無断掲載を禁じます